

【(細目)1-2-1-②】		連携協力・地方における上演等[伝統芸能の公開]				【評定】			
【法人の達成すべき計画】 (4) 伝統芸能の公開及び現代舞台芸術の公演の実施に際しての留意事項等 [伝統芸能の公開] ア より幅広く多くの人が鑑賞することを目指して、分野ごとに前中期目標期間の実績を超えるよう、主催公演の実施に当たっては、個々の実施目的、演目、過去の鑑賞者数の状況等を踏まえた適切な鑑賞者数の目標を設定し、その達成に努める。 イ 外部専門家等の意見を聴取するとともに、アンケート調査を適宜実施し、公演事業に反映させる。 ウ 国、地方公共団体、芸術団体、企業等と連携協力し、共催、受託などによる公演等の実施に努める。 エ 全国各地において広く伝統芸能及び現代舞台芸術を鑑賞できる機会を確保するため、国、地方公共団体、教育委員会等と連携協力を図り、各地の文化施設等において実施する。 オ 我が国の伝統芸能及び現代舞台芸術の海外における理解の促進と活性化等に寄与するため、国等との連携協力を図り、舞台芸術等の国際交流に資する公演等の実施に努める。						B			
						H20	H21	H22	H23
						B	B	B	B
						実績報告書等 参照箇所			
						業務実績報告書 76 頁～79 頁			
【インプット指標】									
(中期目標期間)		H20	H21	H22	H23	H24			
決算額(百万円)		66	68	67	42	49			
従事人員数(人)		47	46	46	46	44			
1) 決算額は、 ・振興会：外部公演入場料(公演事業)、共催公演等収入、公演受託事業収入 ・おきなわ財団：国受託事業収入(文化庁芸術祭・財団自己財源) を計上している。 2) 従事人員数は、各館の制作担当常勤職員及び国立劇場おきなわ業務管理職員の人数を計上している。 ・歌舞伎(第 1 制作課) ・文楽(第 2 制作課、文楽劇場企画制作課企画制作係) ・舞踊・邦楽ほか(第 2 制作課、文楽劇場企画制作係) ・大衆芸能(演芸課、文楽劇場企画制作課企画制作係) ・能楽(能楽堂企画制作課企画制作係) ・組踊等沖縄伝統芸能(新国立劇場・おきなわ部管理課国立劇場おきなわ係) その際、役員及びその他の職員は勘案していない。									
評価基準(年度計画及び評価の視点)		実績				分析・評価			
2 伝統芸能の公開及び現代舞台芸術の公演 (4) 伝統芸能の公開及び現代舞台芸術の公演の実施に際しての留意事項等 ア 外部専門家等の意見を聴取するとともに、アンケート調査を適宜実施し、公演事業に反映させたか。		2-①—⑨ 伝統芸能の公開に際しての留意事項等 1. 外部専門家等の意見聴取、アンケート調査の実施 ① 外部専門家等の意見聴取は、専門委員による公演毎のレポート提出及び年 2 回の公演専門委員会の開催により行った。国立劇場おきなわでは、国立劇場おきなわ公演事業委員による鑑賞後のレポート(公演鑑賞報告書)提出及び年 1 回の公演事業委員会の開催により行った。 ② アンケート調査の実施				・連携協力・地方における上演等について、外部専門家等の意見聴取やアンケート調査を実施しているが、どのように連携協力が強化されたかが不明であり、調査結果の詳細な分析とともに、回答数を確保するための対策が必要である。			
		分野		実施回数	回答数	回収率(配布数)	概ね満足との回答(回答数)		

	共催:東京都教育委員会 後援:文化庁、千葉県、埼玉県教育委員会、神奈川県教育委員会、一般社団法人東京都小学校 PTA 協議会、東京都公立中学校 PTA 協議会、東京私立初等学校協会、一般財団法人東京私立中学高等学校協会 ・ 文楽劇場 6 月文楽鑑賞教室における後援・協力等 後援:文化庁、大阪府教育委員会、大阪府教育委員会、京都府教育委員会、兵庫県教育委員会、奈良県教育委員会、滋賀県教育委員会、和歌山県教育委員会、NHK 大阪放送局 協力:(公財)文楽協会 イ 鑑賞教室地方公演における共催・後援等 ・ 歌舞伎鑑賞教室静岡公演 共催:財団法人静岡県文化財団、静岡県 後援:文化庁、静岡県教育委員会、静岡市教育委員会 ・ 歌舞伎鑑賞教室神奈川公演 共催:かながわ伝統芸能祭実行委員会(神奈川県立青少年センター内) 後援:文化庁、神奈川県教育委員会、神奈川県 PTA 協議会、神奈川県立高等学校 PTA 連合会 ウ 社会人のための鑑賞教室公演における後援・協力等 後援:一般社団法人日本経済団体連合会、公益社団法人経済同友会、東京商工会議所、公益社団法人東京青年会議所 エ 関西元気文化圏共催事業 文楽劇場の全公演 オ 関西学院大学との連携協力に関する協定の締結 関西学院大学との連携協力協定に基づく、大学の授業での文楽技芸員による解説・実演や、学生団体鑑賞等の実施 カ 九州・沖縄から文化力プロジェクト参加 国立劇場おきなわの全公演 キ その他の自主公演等における後援・協力等 (本館) ・ 4 月歌舞伎公演の出演者による被災地でのチャリティー歌舞伎公演における名取市文化振興財団、多賀城市文化センター指定管理者との共催 ・ 本館 5 月舞踊公演「菅原草紙」における東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)、東京発・伝統 WA 感動実行委員会との共催。この公演は、東京都及び公益財団法人東京都歴史文化財団が実施する「東京文化発信プロジェクト」における伝統芸能を広く公開する事業「東京発・伝統 WA 感動」の一環として、同プロジェクトの主催 3 団体と共催したもので、チラシ等の配布や新聞広告への掲載など、宣伝、広報面で協力を得た。 ・ 本館 6 月民俗芸能公演「東日本大震災復興支援 東北の芸能 I 岩手」における岩手県、岩手県教育委員会の後援 ・ 本館 2 月民俗芸能公演「東日本大震災復興支援 東北の芸能 II 宮城」における宮城県、宮城県教育委員会の後援 ・ 本館 3 月琉球芸能公演「新作組踊と琉球舞踊」における松竹株式会社の協力、沖縄県酒造協同	
--	---	--

	組合、オリオンビール(株)の特別協賛 ・ 本館 9 月特別企画公演「日本の太鼓――打に込める思い―」における株式会社浅野太鼓楽器店の協力 (能楽堂) ・ 4 月特別企画公演「阿古屋松」における財団法人観世文庫との共催、及び関連展示「企画展/観世文庫展」における財団法人観世文庫の協力 ・ 9 月特別公演における鴨長明『方丈記』完成八〇〇年記念委員会の後援 (文楽劇場) ・ 文楽劇場公演(5・6 月開催)における大阪府・大阪市・公益財団法人関西・大阪 21 世紀協会が主催する大阪文化祭への参加 ・ 大阪の近隣で活動する小劇場、公共ホール、劇団等との活動連携(5～10 月むりやり堺筋線演劇祭) ・ 国立劇場おきなわ 11 月企画公演「アジア・太平洋地域の芸能」におけるインド大使館、冲印友好の協力 ク 外部の公演等への後援・協力等 ・ 東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)、東京発・伝統 WA 感動実行委員会主催の「三弦 海を越えてーアジアから日本へー」(10 月 11 日、東京芸術劇場コンサートホール)及び「はじめての邦楽ー江戸の響きを体験しよう!ー」(11 月 4 日、江戸東京博物館ホール)に対して制作協力を実施 ・ 社団法人伝統歌舞伎保存会主催の「第 10 回伝統歌舞伎保存会研修発表会」(4 月 18 日、国立劇場大劇場)への協賛 ・ 社団法人伝統歌舞伎保存会主催の「小学生のための歌舞伎体験教室」(7 月 7 日、8 日、31 日、8 月 1 日～7 日)への協賛及び協力 ・ 文化庁・公益財団法人全国高等学校文化連盟・東京都教育委員会・東京都高等学校文化連盟主催の「第 23 回全国高等学校総合文化祭優秀校東京公演」(8 月 25 日～26 日、国立劇場大劇場)への協賛 ・ 一般社団法人江戸文化歴史検定協会主催の「第 7 回江戸文化歴史検定」(10 月 28 日)への協力 ・ よこすか市民会議(YCC)主催の「2012 よこすか市民会議まちづくり文化フェア」のうち、「よこすか芸術文化フェア」の一環として開催された「伝統文化学習鑑賞会(文楽学習鑑賞会)」(12 月 13 日、伝統芸能情報館レクチャー室)への協力 ・ 社団法人伝統歌舞伎保存会主催の「第 11 回伝統歌舞伎保存会研修発表会」(12 月 15 日、国立劇場大劇場)への協賛 ・ 文楽「八陣守護城」熊本公演(3 月 27 日、熊本県立劇場)への協力 ・ 公益財団法人文楽協会が行う文楽地方公演等に対する、かしら・床山・衣裳・小道具の技術職員の派遣 ・ 沖縄県伝統芸能公演実行委員会(会長 沖縄県文化観光スポーツ部長)に実行委員として参加し、国立劇場おきなわ大劇場及び小劇場における「沖縄県伝統芸能公演」の共催(主催:同実行委員会、共催:沖縄県・(公財)沖縄県文化振興会・(公財)国立劇場おきなわ運営財団) 3. 全国各地の文化施設等における公演	
--	---	--

	・ チャリティー歌舞伎名取公演(共催:名取市文化振興財団、4月25日、名取市文化会館) ・ チャリティー歌舞伎多賀城公演(共催:多賀城市文化センター指定管理者、4月26日、多賀城市民会館) ・ 歌舞伎鑑賞教室静岡公演(共催:財団法人静岡県文化財団、6月26日、2回公演、静岡県コンベンションアーツセンター グランシップ、入場者数:1,160人) ・ 歌舞伎鑑賞教室神奈川公演(共催:かながわ伝統芸能祭実行委員会、7月26日～27日、4回公演、神奈川県立青少年センター、入場者数:2,018人) ・ 国立劇場おきなわ第2回県外講演「琉球伝統芸能鑑賞と講演」(2月11日、文楽劇場小ホール)、韓国藝術総合学校による招請公演「韓国藝術総合学校における琉球舞踊公演」を実施(9月6日～7日) 4. 舞台芸術等の国際交流 (1) 海外の芸能関係者等の来場、見学等 ・ 国立劇場 3件7人 主な来場者:東京芸術大学建築科留学生、台湾文化局関係者、駐日ドイツ連邦共和国大使一行 (2) 海外における公演等 ・ 韓国藝術総合学校による招請公演「韓国藝術総合学校における琉球舞踊公演」を実施(9月6日～7日)	
--	--	--

【(細目)1-2-1-③】 快適な観劇環境の形成 〔伝統芸能の公開〕						【評価】			
【法人の達成すべき計画】 (5) 快適な観劇環境の形成 〔伝統芸能の公開〕 観客本位の快適な環境の形成のため、以下のとおりサービスの向上に努め、来場者等の満足度の向上を図る。 ア 高齢者、身体障害者、外国人等の利用にも配慮した快適な観劇環境を提供するため、動線や施設設備の工夫、表示類の整備、英語等主要外国語による案内・解説等の充実、売店やレストラン等におけるサービスの向上を図る。 イ インターネットによる入場券販売の充実等により、観客の利用形態に応じた利便性の高い多様な販売方法を提供する。 ウ 公演内容等の理解を促進するため、公演内容に応じて解説書を作成するとともに、音声同時解説や字幕表示などのサービスを積極的に提供する。また、鑑賞団体等に対し、観劇にあわせた事前の公演内容の説明会や施設の見学会を適宜実施する。 エ 観客等の要望、利用実態等を把握するため、劇場モニター制度の導入を検討する。						A			
						H20	H21	H22	H23
						A	A	A	A
						実績報告書等 参照箇所 業務実績報告書 127 頁～140 頁			
【インプット指標】									
(中期目標期間)	H20	H21	H22	H23	H24				
決算額(百万円)	583	1,548	1,059	768	774				
従事人員数(人)	58	57	57	55	57				
1) 決算額は、 ・振興会:解説書作成費、観客勧誘事務費、鑑賞会事務費、施設整備費(交付金)、施設整備費(補助金)※おきなわ土地購入費を除く。 ・おきなわ財団:解説書作成費(財団自己財源)、観客勧誘事務費(財団自己財源)、鑑賞会事務費(財団自己財源)、施設整備費(交付金)を計上している。 2) 従事人員数は、各館の施設整備・営業担当常勤職員及び国立劇場おきなわ業務管理職員の人数を計上している。 ・施設整備(本館施設課、能楽堂事業推進課施設係、文楽劇場事業推進課施設係、新国立劇場・おきなわ部管理課国立劇場おきなわ係) ・営業(本館営業部宣伝課・営業課・劇場課(施設利用室を除く)、演芸場営業課、能楽堂営業課(劇場利用係を除く)、文楽劇場営業課(劇場利用係を除く)、新国立劇場・おきなわ部管理課国立劇場おきなわ係) その際、役員及びその他の職員は勘案していない。									
評価基準(年度計画及び評価の視点)		実績				分析・評価			
2 伝統芸能の公開及び現代舞台芸術の公演 (5) 快適な観劇環境の形成 ア 利用者の意見等を踏まえ、老朽化した劇場内備品の更新や新国立劇場内エスカレーターの設置等観客用設備の整備を行うとともに、売店・レストラン等におけるサービスの充実や観劇時のマナーの呼びかけを行い、利用者にとって安全で快適な観覧環境を提供したか。 また、外国人利用者について		2-③ 快適な観劇環境の形成 ＜1＞観劇環境整備、外国人利用者への対応 1. 設備等の環境整備(本館) ・外国人利用者のために、劇場ロビーまわりの表示類(英語表記付)について統一感をもたせ分かりやすくした。 ・大劇場ロビーにおいてインフォメーションディスプレイを活用し、次回公演の案内や観劇マナー、緊急時の避難導線等を映し出しお客様の注目を集めた。 ・7月歌舞伎鑑賞教室公演で、大劇場前庭に冷却ミスト機を設置、来場者の熱中症対策を行った。 ・大・小劇場の客席については、安全性に留意し、破損部の補修・交換等、随時保守を行った。 ・大・小劇場ロビー内の案内表示類については、統一性のある分かりやすいデザイン・表現に留意したものに改め大幅に更新した。さらに検証をすすめ、客席内2階と3階を繋ぐ階段の段差が一定で				・各劇場ともに、劇場施設の整備を少しずつ進めるとともに、ロビーでのディスプレイ、熱中症対策などの取組、季節や行事に合わせた催しや演出など、快適な観劇環境の整備に努め、確実に成果を挙げている点は評価できる。 ・アンケート調査の結果や要望・苦情等に関する全職員へ周知、あぜくら会会員モニターによるグループインタ			

ては、英語等パンフレットの配布など各種情報の提供に努め、利用環境の整備を進めたか。 イ インターネット・チケット販売、電話予約など観客の利用形態に応じた多様な販売方法を提供し、販売の促進を図ったか。また、インターネット・チケット販売において、安定的なサービスの提供に努めるとともに、引き続き機能の向上を図ったか。 ウ 公演内容等の理解を促進するため、以下のサービス等を提供したか。 ・ 解説書を作成するとともに、内容の充実を図ったか。 ・ 音声同時解説とともに、能楽堂の座席字幕装置をはじめとする字幕表示を積極的に活用したか。 ・ 鑑賞団体の求めに応じて積極的に公演内容の事前説明を行うとともに、学生等の施設見学を受け入れたか。 エ ホームページ、ご意見箱等を通じて寄せられた観客等の意見・要望について迅速な対応を図るとともに、対応状況の把握・管理、職員への周知を行い、サービスの向上への活用にも努めたか。 また、観客等の要望、利用実態等を把握するため、あぜくら会会員サービスについてのモニターに対して意見の聴取を行ったか。	なく危険であることから、ステップの色を替え注意喚起を促した。 ・ 客席内、車イススペースの絨毯の色を替え、段差部分を鮮明に差別化しお客様の足元の安全確保に努めた。 ・ 大劇場エスカレーター入口へロープパーティションを配置し、混雑時の導線確保による安全対策を図った。 (演芸場) ・ 観客の要望に応え、1階トイレの新規増築及び従来のトイレの改修、さらに2階トイレの全面改修を実施した。 ・ 特別企画公演「親子で楽しむ演芸会」(7月28日)において、ロビーを風船やバルーン人形などで装飾、子供たちが演芸に親しめるよう工夫した。また親子連れのお客様に夏休みの絵日記等ではクレヨンをお土産として手渡した。 (能楽堂) ・ 平成25年度に開場30周年を控え、施設の美観向上と維持保全のため、能舞台屋根等清掃、客席内京壁補修、客席椅子・ロビー絨毯クリーニング、食堂テーブル・椅子・ショーケース補修更新等を実施した。 ・ 能楽堂の建物は能楽の幽玄な世界にふさわしい建築であり、観客の興味をさらに醸成するよう、引き続き夜間のガーデンライトアップや庭園管理に努めて景観を保持した。 ・ 施設紹介の英文パンフレット、演目解説の英文パンフレットの作成・配布、英語による案内表示、アナウンスなどのサービスを提供し、引き続き外国人の利用環境の充実を図った。 (文楽劇場) ・ ロビー内の案内表示類について、統一性のある分かりやすいデザイン・表現に留意したものに改めた。 ・ 2階ロビー内のモニターを利用し、NHKエンタープライズが制作した文楽のDVDのダイジェスト映像の上映を行い、ロビーにおける顧客サービスや文楽DVDの販売促進につなげることができた。また、演芸公演の日は、寄席の雰囲気を作るために1階ロビー外で寄席囃子を流し、演芸公演を盛上げた。 (国立劇場おきなわ) ・ 出演者、稽古室利用者の要望に応え、楽屋口に屋根を設置し階段の高低差を小さくする改修工事を実施し、楽屋口利用者が使いやすい快適な施設整備を行った。 2. 観客サービスの充実 ①売店、レストランにおけるサービスの向上 (本館) ・ 飲料売店周辺に立食テーブルを配置しお客様の利便性を高めた。 ・ 毎月の連絡会議において売店・食堂を運営する業者と意見を交わしながら営業方法の工夫に努めた。 ・ 食堂に対して、各歌舞伎の公演内容に合わせた弁当の考案を求め、魅力的なメニューの提供に努めた。 ・ 大劇場2階食堂では、壁面を利用し季節に合わせた装飾を行い華やかな雰囲気の創出に努めた。	ビューの実施などは評価できる。今後さらなる改善につなげられたい。 ・ 劇場内のアナウンスについては、観客が芸術を楽しめるよう、状況に応じてより適切な対応に努められたい。
---	--	--

	・ 文楽公演では、終演後、次の部を引き続き観劇する観客のため、2階・3階の食堂・喫茶を継続して営業し対応した。 ・ 公演内容に因んで、各地の観光協会等の協力により、劇場ロビー内に特設会場を設けて物産品等を販売した。 群馬県水上物産展 10/5～10/27(10 月歌舞伎「塩原多助一代記」にちなんで) 大江戸物産展 11/3～11/26(11 月歌舞伎「浮世柄比翼稲妻」にちなんで) 京都物産展 12/2～12/25(12 月歌舞伎「鬼一法眼三略巻」にちなんで) 大相撲物産展 1/3～1/27(初春歌舞伎「夢市男達競」にちなんで) 隅田川物産展 3/5～3/26(3 月歌舞伎「隅田川花御所染」にちなんで) ・ 特別メニュー・商品類の販売、物産展の開催、掲出については、場内看板や HP で周知し、利用者の関心が得られるよう工夫した。 ・ マスコットキャラクター「くろごちゃん」のメモ帳を国立劇場オリジナルグッズとして作成した。 (能楽堂) ・ 平成 25 年度に開場 30 周年を控え、食堂のテーブル・椅子補修、ショーケース更新等を実施した。 ・ 食堂は公演状況に応じ開場前及び終演後も営業を行い、また売店は、公演中は一般の来場者でも買物ができるようにして、利用者の利便を図った。 ・ 国立能楽堂収蔵の能面・能装束等をデザイン化したオリジナルグッズ(絵はがき、クリアファイル、一筆箋、等)の販売を能楽堂内売店及び国立劇場売店・新国立劇場シアターショップで継続した。 ・ 食堂、売店に関するアンケート調査を 9 月と 3 月に実施して利用者の要望等を収集し、調査結果について関係部署、食堂・売店業者間で意見交換を行って、一層のサービス向上に努めるよう指導した。 (文楽劇場) ・ 好評の「文楽の衣裳」を増刷した。 ・ 食堂と意見を交わしながら一層のサービス向上に努めるよう指導した。 ・ ホームページにおいて、食堂のお勧め商品を掲載して、利用者の利便性向上を図った。 (国立劇場おきなわ) ・ 自主公演や貸劇場に関する集客情報等を楽屋食堂及びカフェ・ビュッフェを運営している業者に提供し、サービス向上に努めるよう指導した。 ・ 公演によって共通ホワイエや劇場ロビー内に特設会場を設け、各地の観光協会等の協力により、演目に因んだ物産品等を販売した。 伊江島物産展 6/9～6/10(6 月沖縄芝居公演「伊江島ハンドー小」にちなんで) 多良間物産展 10/14(10 月民俗芸能公演「多良間の八月踊り～塩川の芸能～」にちなんで) 宜野座物産展 2/24(2 月民俗芸能公演「沖縄本島民俗芸能祭～宜野座村～」にちなんで) 琉球伝統菓子展 3/15～3/17(3 月企画公演「新作組踊 聞得大君誕生」にちなんで) ②その他の観客サービスの向上 ・ 一年の幕開けを寿ぎ、各館で正月のイベントを実施した。 本館：鏡開き(1 月 3 日)、曲芸・囃子(1 月 3 日)、獅子舞(1 月 3 日～7 日)、櫓太鼓の実演を日本相撲協会の協力により実施(1 月 3 日～6 日)、手拭いまき(1 月 3 日～27 日)。また、	
--	--	--

	2 階ロビーにて相撲関連の展示(1 月 3 日～27 日)、ロビーには繭玉をあしらった。また、口上看板や大風、劇場正面には積樽を飾り、初春の晴れやかな雰囲気を出した。 演芸場 : 鏡開き(1 月 2 日)、囃子(1 月 2 日)、獅子舞(1 月 2 日～7 日)、手拭いまき(1 月 2 日～7 日)。また、階段に啓翁桜を飾り(1 月 3 日～7 日)、ロビーには繭玉をあしらった。また、正面入口には積樽を飾り、舞台上に松竹梅のセットを配置し(1 月 2 日～7 日)、初春の晴れやかな雰囲気を出した。 能楽堂:1 月 30 日まで舞台に注連をはり、お正月の雰囲気をお楽しみいただいた。 文楽劇場: 鏡開き(1 月 3 日)、手拭いまき(1 月 3 日～10 日)、十日戎(1 月 10 日) (本館) ・ 国立劇場オリジナルキャラクターの着ぐるみ「くろごちゃん」を活用し、歌舞伎公演・特別イベント時を中心に、初日や中日等にロビーにて公演案内等のチラシの配布や土産品等の紹介をしたほか、一緒に記念写真の被写体になる等観客を和ませ好評を得た。 ・ 7 月の親子のための歌舞伎教室時に、「くろごちゃん」を解説「歌舞伎のみかた」において出演者として舞台上に登場させ、親しみやすい国立劇場をアピールした。また、劇場ロビーに立入晴子氏デザインによる桑寺弾正のイラストを使った撮影コーナーや、くろごちゃんのイラストを使った歓迎看板を設置したほか、来場者を対象に「かぶきクイズ」を実施し、回答者全員に参加賞(桑寺弾正×くろごちゃんイラストシール)を配布(回答者 13 公演で約 7,500 名)するなど観客サービスに努めた。 ・ 歌舞伎・文楽において託児サービスを行い、観客の利便を図った。また声明・邦楽等静寂を必要とする短期公演でも実施した。(253 回開室、利用者数 320 名)。 ・ 休憩時にトイレが混み合うことが多いため、状況に応じて大・小劇場のトイレを相互に融通し、混雑を軽減させる対策をとった。 ・ 歌舞伎公演休憩時に、大劇場ロビーからチケット売り場のドアを開放し利用者の利便性向上とチケット販売促進を図った。 ・ 観客相互が気持ちよく観劇できるよう観劇マナーの向上について協議・検討し、チラシ(和・英)・解説書・あぜくら会報・劇場ニュース等の印刷物や、教室公演の字幕・アナウンス・イヤホンガイド・ホームページ等、様々な媒体を通じて周知に努めた。 ・ ロビーに設置したご意見箱の意見を回収し、担当部署への迅速な報告によって観客サービスの向上に努めた。 ・ 国立劇場により親しんでもらうため、「国立劇場さくらまつり」を開催した。(平成 24 年 3 月 30 日～4 月 8 日、平成 25 年 3 月 29 日～4 月 3 日)。 (国立劇場おきなわ) ・ 沖縄県の受託を受け 1～3 月の期間限で主要ホテル等と劇場間で無料巡回バスを運行させ、観客の利便性向上を図った。 ・ 楽屋食堂口エレベータ前の掲示板に、劇場内の業務に関する情報及び、劇場関係の新聞記事などを掲示して広報に努めた。 ・ 観劇上の禁止事項を場内に掲示し、注意喚起を図った。 3. 安全で快適な環境の整備 (本館)	
--	--	--

	・ 場内案内担当業者は継続して定期的なスキルアップ研修を行っているが、大震災を想定した訓練を売店・食堂業者も含めて複数回実施した。 ・ 職員、委託業者など全職域が参加する自衛消防訓練(地震火災総合訓練)を11月に実施した。 ・ 劇場ロビー内へ新たな音響設備(スピーカーの増設)の導入により、より鮮明なアナウンス放送の実現が可能になった。 (能楽堂) ・ 場内案内担当業者が避難訓練を含む研修を随時行い、緊急時の誘導等についてスキルアップに努めた。 ・ 職員、委託業者など全職域が参加する自衛消防訓練を年2回実施した。避難誘導、消火器の取扱い等について実地訓練(9月)を行い、また新しくなった非常放送設備の操作確認を兼ねて避難訓練(3月)を行った。 ・ 職員、委託業者など全職域が参加して、火災・地震等の緊急時の対応について確認・検討する能楽堂運営安全会議を10月に実施した。 (文楽劇場) ・ 文楽劇場では、6月と3月に消防訓練を行った。6月には観劇団体の高校生と先生方計715名の協力を得、劇場関係者全員参加による大規模な避難誘導訓練を実施した。また、3月は職員及び委託業者社員が消防本部制作のビデオを鑑賞しビル火災について学んだ後、避難誘導訓練を実施した。 (国立劇場おきなわ) ・ 職員、委託業者など全職域が参加する自衛消防訓練を年2回(6月、12月)実施して、避難誘導、消火器の取扱い等についての実地訓練を行った。 ・ 共通ロビーから楽屋へ通じる扉にテンキーロック扉を導入し、防犯と安全性を高めた。 4. 外国人利用者への対応 ・ ホームページにおいて、英語での施設案内・公演案内・劇場周辺地図等を掲出し、外国人利用者の利便の向上を図っている。 (本館) ・ 外国人観光客への情報発信・公演周知活動をさらに強化するため、英語版に引き続き、中国語版(簡体字・繁体字)、韓国語版のコンパクトガイド(歌舞伎・文楽の紹介リーフレット)を作成し、都内のツーリストインフォメーションセンター等に掲出を依頼した。 ・ 歌舞伎公演・文楽公演では、公演解説書に英文の演目解説を併載した。 ・ 歌舞伎鑑賞教室・文楽鑑賞教室・短期公演では、演目解説の英文リーフレットを作成し配布した。 ・ 引き続き英語版の観客マナー及び緊急時の避難経路・チケットの購入方法等を記載したチラシを作成し、ロビー等に設置した。 ・ 場内放送において英語アナウンスを実施した。 ・ 英語のイヤホンガイドを継続して実施した。 (能楽堂) ・ 施設紹介の英文パンフレット、演目解説の英文パンフレットの作成・配布、英語による案内表示、場内アナウンスなどのサービスを提供し、引き続き外国人の利用環境の充実を図った。 ・ 座席字幕装置を活用して、5月企画公演(蠟燭能)を除く50公演で日本語・英語2チャンネル方式
--	---

	で字幕表示を実施した。 ・ 座席字幕装置完備を明記した英文チラシを作成し、ホテル・観光情報センター・空港等に配布して外国人客への周知・集客に努めた。 (文楽劇場) ・ 文楽を紹介するリーフレットを英語・中国語(簡体字)・韓国語で配布し、外国からの観客に文楽の理解を深めてもらうために活用した。 ・ 関西国際空港の関西観光情報センター(到着ロビー内)に英語・中国語(簡体字)・韓国語の文楽紹介パンフレットを置き、デジタルサイネージに毎公演のポスターを掲出した。 ・ 短い時間で文楽を楽しめる「幕見席」について、ホームページに利用案内を掲載し、近隣ホテルのコンシェルジュ等へ説明を行うなど、外国人観光客の勧誘とサービス向上に努めた。 ・ 文楽公演・文楽鑑賞教室では、英文解説リーフレットを作成・配布した。文楽公演では英語に加え中国語(簡体字)・韓国語の解説リーフレットを作成・配布するとともに、英語版イヤホンガイドなどのサービスを提供した。 ・ 英語での対応ができる劇場案内スタッフを配置して、サービスの向上を図った。 ・ 外国人利用者に対応した案内表示の整備を進め、英語による場内アナウンスを実施した。 <2>インターネット・チケット販売の活用 ・ インターネット・チケット販売システムにおいて、利用者が直接座席を選択できる機能を導入、順次サービス対象の公演を拡大し、平成 25 年度からは全公演において座席選択サービスを提供する。 ・ インターネット販売においてスマートフォンでの販売を行うためシステムの整備を行った。25 年 4 月 23 日からサービスを開始した。 ・ クレジットカード決済時のセキュリティを強化するために、24 年 4 月 13 日より購入手続きの際のセキュリティコードの入力及び NTJ メンバー登録を必須化した。 ・ 親子を対象とする公演のインターネット販売では、本館・演芸場・能楽堂の各公演は、会員及び一般発売に先行して発売した。文楽劇場の公演は一般発売に先行して会員発売日と同日に発売した。 ・ チケットセンターホームページに各館の親子企画を紹介するサイトを設置し、さらに、振興会トップページのバナーから誘導した。 1)「親子で楽しむ歌舞伎教室」(7 月 15 日(日)・16 日(月・祝)・20 日(金)～24 日(火)) インターネット販売は 5 月 26 日(土)に開始、電話予約は翌 27 日(日)に開始 予約結果:インターネット予約 2,464 件(8,026 枚)、電話予約 1,350 件(4,241 枚) 2)「親子で楽しむ日本の音」(7 月 21 日(土)) インターネット・電話予約販売は共に 4 月 28 日(土)に開始 予約結果:インターネット予約 11 件(31 枚)、電話予約 11 件(29 枚) 3)「親子で楽しむ演芸会」(7 月 28 日(土)) インターネット販売は 5 月 28 日(月)に開始、電話予約は翌 29 日(火)に開始 予約結果:インターネット予約 50 件(149 枚)、電話予約 32 件(115 枚) 4)「夏休み親子のための能の会」(8 月 4 日(土))及び「夏休み親子のための狂言の会」(8 月 11 日(土)) インターネット販売は 5 月 28 日(月)に開始、電話予約は翌 29 日(火)に開始 予約結果:「夏休み親子のための能の会」インターネット予約 76 件(222 枚)、電話予約 23 件(61	
--	--	--

枚)、「夏休み親子のための狂言の会」インターネット予約 114 件(339 枚)、電話予約 52 件(154 枚)

5)「文楽親子劇場」(7 月 21 日(土)～8 月 7 日(火))

インターネット販売は 6 月 2 日(土)に開始、電話予約は翌 3 日(日)に開始

予約結果:インターネット予約 11 件(34 枚)、電話予約 14 件(41 枚)

・ 国立劇場おきなわでは、24 年から自主公演のインターネット・チケット販売サービスを行っており、遠方のチケット購入希望者へのサービス向上に努めている。また、チケット購入時の利便性向上のため、コンビニエンスストア等でチケット代金の支払いができるサービスも引き続き行っている。

＜3＞解説書の作成、字幕表示・音声同時解説の活用、公演説明会・施設見学等の実施

1. 解説書の作成

- ・ 本館大劇場及び小劇場でのすべての自主公演について公演解説書(プログラム)を作成した。
- ・ 演芸場では、毎月「国立演芸場ガイド」を作成し、全自主公演の出演者・演目情報を掲載した。
- ・ 能楽堂では、公演内容等の理解を促進するため公演解説書(プログラム)「国立能楽堂」(月刊・年 12 回)を作成し、全自主公演の解説を施した。また、公演内容に応じて、「能楽鑑賞教室」「夏休み親子で楽しむ能の会」「夏休み親子で楽しむ狂言の会」ではイラスト入りの分かりやすいパンフレットを作成し無料配布した。4 月特別企画公演の復曲能「阿古屋松」上演に際しては、世阿弥自筆本の写真等を掲載したパンフレットを作成し無料配布した。
- ・ 文楽劇場では、上方演芸特選会を除く全ての自主公演について公演解説書(プログラム)を作成した。6 月文楽鑑賞教室では、演目の解説や登場人物紹介等をイラスト化し、親しみやすくなるように努めた。
- ・ 国立劇場おきなわでは、ステージガイド「華風」(月刊・年 12 回)を作成し、全自主公演の解説をはじめ、新作公演では公演制作レポートや対談を掲載した。また、本館と共催で上演した新作組踊公演では、「華風」と本館小劇場のプログラムをそれぞれの劇場で販売し、ともに好評であった。

2. 字幕表示・音声同時解説の活用

(1) 字幕表示の実施

ジャンル	実施公演数	内 訳
歌舞伎公演(鑑賞教室含む)	1 公演	6 月鑑賞教室、
文楽公演(鑑賞教室含む)	10 公演	全公演
舞踊・邦楽・声明・民俗芸能・特別企画公演	16 公演	5 月舞踊公演、8 月舞踊公演、11 月舞踊公演、3 月舞踊公演
		6 月邦楽公演、7 月邦楽公演、10 月邦楽公演(2 公演)、1 月邦楽公演
		9 月雅楽公演
		11 月声明公演
		6 月民俗芸能公演、3 月琉球芸能公演
		4 月舞踊・邦楽公演、6 月特別企画公演、
		9 月特別企画公演(文楽劇場)
能楽公演(鑑賞教室含む)	50 公演	10 月企画公演(蠟燭能)を除く全公演
組踊等沖縄伝統芸能公演	28 公演	国立劇場寄席及び台風による中止公演を除く全公演

(2) イヤホンガイドサービスの実施

- ・ 歌舞伎・文楽の全公演で、日本語と英語によるイヤホンガイドサービスを実施した(文楽鑑賞教室は日本語版のみ)。
- ・ 6 月歌舞伎鑑賞教室において、聴覚障害者向けに小型モニターを利用した字幕表示の使用を試験的に行った。
- ・ イヤホンガイドの放送では、次回公演の案内を加えて宣伝に努めた。

【特記事項】

能楽堂では、座席字幕装置を活用して、5 月企画公演(蠟燭能)を除く 50 公演で日本語(詞章)・英語の 2 チャンネル方式で字幕表示を実施した。

なお、貸劇場公演においても座席字幕装置の利用が能楽協会など 3 件あった。

3. 公演説明会・施設見学等の実施

各館において、鑑賞団体等に対する公演説明会、施設見学の受入れ、バックステージツアーを実施し、上演演目への理解や劇場施設への親近感の醸成に努めた。

(1) 公演説明会の実施

区 分	件 数	参加人数
本館・演芸場	153 件	6,671 人
能楽堂	9 件	283 人
文楽劇場	93 件	3,444 人
合 計	255 件	10,398 人

(2) 施設見学の実施

区 分	件 数	参加人数
本館・演芸場	9 件	200 人
能楽堂	9 件	87 人
文楽劇場	7 件	97 人
国立劇場おきなわ	36 件	960 人
合 計	61 件	1,344 人

(3) バックステージツアーの実施

区 分	件 数	参加人数
本館・演芸場	73 件	2,961 人
能楽堂	5 件	114 人
文楽劇場	31 件	722 人
国立劇場おきなわ	2 件	135 人
合 計	111 件	3,932 人

【特記事項】

- ・ 旅行代理店営業担当者向けに施設見学・公演鑑賞会を実施した。
- ・ 国立劇場おきなわのバックステージツアーは、8 月 3 日～5 日に各日 2 回行う予定であったが、8 月 5 日は台風接近のために中止した。

	・ 上記施設見学のほか、新国立劇場では 10 件 91 名の外国からの見学者受入れを行った。 (4) 劇場外での伝統芸能講座の実施 ① 平成 22 年度より開催している社会人向け講座シリーズ「国立劇場 in 丸の内」の第 7 回～第 9 回を実施した(会場:marunouchi cafe SEEK 旧称 丸の内カフェ)。第 7 回、第 8 回では能楽を、第 9 回では文楽を取り上げた。 ・ 「国立劇場 in 丸の内 vol.7 日本の伝統芸能を知る 能の世界 その 1～囃子編～」 日時:12 月 12 日(水)19:00～20:30 講師:田邊恭資(能楽囃子 小鼓方大倉流)、大倉慶乃助(能楽囃子 大鼓方大倉流) モデレーター:猪又宏治(国立能楽堂部企画制作課長) 参加者数:40 名 ・ 「国立劇場 in 丸の内 vol.8 日本の伝統芸能を知る 能の世界 その 2～面・装束編～」 日時:平成 25 年 1 月 21 日(月) 19:00～20:30 講師:川口晃平(能楽 観世流シテ方) モデレーター:猪又宏治(国立能楽堂部企画制作課長) 参加者数:41 名 ・ 「国立劇場 in 丸の内 vol.9 日本の伝統芸能を知る 文楽の世界～人形～」 日時:平成 25 年 2 月 8 日(金) 19:00～20:30 講師:吉田幸助(文楽人形遣い) モデレーター:廣瀬哲也(国立劇場芸能部第二制作課長) 参加者数:56 名 ② 渋谷区立恵比寿社会教育館からの依頼により、渋谷区内在住・在勤・在学の高校生以上を対象とした同館主催の連続講座「初心者のための能・狂言入門」(全 7 回/定員 50 名/受講者 48 名)の実施に協力した。 ・ 第 1 回『公演の鑑賞の前に』6 月 8 日(金)18:30～20:30 会場:渋谷区立恵比寿社会教育館 講師:猪又宏治(国立能楽堂企画制作課長) ・ 第 2 回『公演鑑賞』6 月 15 日(金)18:30～20:30 会場:国立能楽堂 国立能楽堂定例公演 狂言「簸屑」能「敦盛」 ・ 第 3 回『狂言の魅力』6 月 20 日(木)18:30～21:00 会場:渋谷区立恵比寿社会教育館 講師:大貫誠之(国立能楽堂企画制作課) ・ 第 4 回『体験 狂言の所作』6 月 27 日(水)18:30～20:30 会場:国立能楽堂研修能舞台 講師:山本則重(狂言方大藏流)、山本則秀(狂言方大藏流) ・ 第 5 回『能の魅力』7 月 4 日(水)18:30～20:30 会場:渋谷区立恵比寿社会教育館 講師:吉成大四郎(国立能楽堂企画制作課) ・ 第 6 回『体験 能の謡』7 月 11 日(水)18:30～20:30 会場:国立能楽堂研修能舞台 講師:川口晃平(シテ方観世流) ・ 第 7 回『体験 お囃子』7 月 25 日(水)18:30～20:30 会場:国立能楽堂研修能舞台 講師:栗林祐輔(森田流笛方)、森貴史(幸流小鼓方)、佃良太郎(高安流大鼓方)、大川典良(金春流太鼓方) (5) ボランティアの活用 文楽劇場資料展示室において、平成 13 年発足のボランティア団体「文楽応援団」(24 年度団員数	
--	---	--

55 人)が、文楽公演期間中、文楽全般についての解説を行った。24 年度は、1 日平均 12 人の解説員が、414 人の観客に対し解説を行った。

<4>意見・要望等の把握と対応

1. 意見・要望等への対応体制

- ・ 各劇場ロビーに「ご意見箱」を設置
ご意見箱 316 件(ご意見箱 本館 114 件、演芸場 23 件、能楽堂 35 件、文楽劇場 129 件、国立劇場おきなわ 15 件)
- ・ ホームページに「ご意見欄」を設置
ホームページの「ご意見欄」323 件(振興会ホームページ 116 件、国立劇場おきなわホームページ 23 件)

2. 意見・要望等への対応状況

- ・ ホームページや劇場内ご意見箱に寄せられた要望・苦情に対しては、構築した連絡体制に沿って関係部署間で事実関係の調査検討及び協議を行い、迅速に対応し、可能な限り回答を行うほか、感想・感謝等の御意見に対しても、メール・手紙の発送等により利用者とのコミュニケーションの促進を図った。回答内容について役員へ報告の上、全職員へ館内 LAN による周知を行い、問題意識の共有を図るとともに、事業等への反映とサービスの向上に努めた。

3. モニターに対する意見の聴取

あぜくら会会員によるモニター調査は、9 月 12 日(水)文楽公演、10 月 12 日(金)演芸場中席公演、11 月 12 日(月)歌舞伎公演を観劇日に定め、募集は会報「あぜくら」に掲載しそれぞれ 20 名の応募者を募った。当選者の選考は、あぜくら会に対しての意見や年齢、性別、職業の有無等を考慮しながら決定した。調査方法は、モニター当選者に事前アンケートを送付し回答を返信してもらい、観劇当日にはアンケートで得た意見を念頭に、グループインタビューを実施した。

当選者の内訳は、9 月 12 日(水)文楽公演 20 名(募集 20 名)、10 月 12 日(金)9 名(募集 20 名)、11 月 12 日(月)20 名(募集 20 名)で行った。会員ならではの視点からの意見も多く見られた。

《自己点検評価》

○ 良かった点・特色ある点

- ・ ホームページや劇場内ご意見箱に寄せられた意見・要望等については、連絡体制を更に充実させ、該当部課の対応期限を明示し迅速な返答に努めた。館内 LAN による情報共有の継続により、職員間において苦情対応等の相互検証が進み、職員の観客サービスに対する意識を高めることができた。また、意見・要望等の内容を検討し、劇場内でのサービス方法、劇場内設備やホームページの改善等に反映させた。
- ・ 大・小劇場内トイレの洋式トイレの数を増やし快適性を高めるとともに屋外トイレ(多目的トイレを含め)・喫煙室を新たに改築し利便性を高めることができた。
- ・ 飲料売店周辺に立食テーブルを配置しお客様の利便性を高めることができた。
- ・ 能楽堂では座席字幕装置を活用して、10 月企画公演(蠟燭能)を除く 50 公演で日本語(詞章)・英語の 2 チャンネル方式で字幕表示を実施した。「能楽鑑賞教室」では中・高生向けの解説を追加し、また

	「夏休み親子で楽しむ能の会」「夏休み親子で楽しむ狂言の会」では子どもにも分かりやすい解説を追加して 3 チャンネル方式とし、観客層に合わせたきめ細かい字幕表示を実施し好評を得た。 ・ 国立劇場おきなわでは、公演によって特設会場を設け各地の観光協会等の協力により、演目に因んだ物産品等を販売したが、公演を盛り上げ来場者にも好評であった。	
--	--	--

【(細目)1-2-1-④】 広報・営業活動の充実[伝統芸能の公開]					【評定】			
【法人の達成すべき計画】 (6) 広報・営業活動の充実 [伝統芸能の公開] より多くの人々が幅広い分野の公演を鑑賞することを目標として、以下の取組みにより一層効果的な広報・営業活動を展開する。 ア 公演内容に応じた効果的な宣伝活動を実施する。また、伝統芸能、現代舞台芸術についての国民の理解促進、情報入手等に寄与し、振興会の事業について周知を図るため、広報誌を定期的に発行するとともに、英語を含むホームページ・メールマガジン等による情報提供を充実する。ホームページについては中期目標期間のアクセス件数を前中期目標期間の実績以上とする。 イ 年間の公演を通して購入できるシーズンシート、セット券等の拡充など鑑賞者の需要を的確にとらえた営業活動を展開する。 ウ 会員組織において、会報による定期的な情報提供、入場券販売サービス、会員向け催事の開催等により観劇機会の増加を図る。また、会員に対しアンケート調査を適宜実施し、サービスの向上を図る。なお、会員数については、前中期目標期間の実績以上とする。					A			
					H20	H21	H22	H23
					A	A	A	A
					実績報告書等 参照箇所 業務実績報告書 141 頁～155 頁			
【インプット指標】								
(中期目標期間)	H20	H21	H22	H23	H24			
決算額(百万円)	328	316	360	362	325			
従事人員数(人)	64	61	62	63	64			
1) 決算額は、 ・振興会:各館の公演費のうち宣伝費、宣伝諸費、鑑賞会事務費 ・おきなわ財団:公演費のうち宣伝費(財団自己財源)、宣伝諸費(財団自己財源)、鑑賞会事務費(財団自己財源) を計上している。 2) 従事人員数は、各館の広報担当・営業担当常勤職員及び国立劇場おきなわ業務管理職員の人数を計上 ・広報(本館総務課普及渉外係、情報推進課、新国立劇場・おきなわ部管理課国立劇場おきなわ係) ・営業(本館営業部(劇場課を除く)、演芸場営業課、能楽堂営業課(劇場利用係を除く)、文楽劇場営業課(劇場利用係を除く)、新国立劇場・おきなわ部管理課国立劇場おきなわ係) その際、役員及びその他の職員は勘案していない。								
評価基準(年度計画及び評価の視点)		実績				分析・評価		
2 伝統芸能の公開及び現代舞台芸術の公演 (6) 広報・営業活動の充実 ア 効果的な広報・営業活動の展開 a. ホームページにおける公演情報、行事情報等の早期掲載及び内容の充実に努めたか。またアクセス動向等を分析して		＜1＞効果的な広報・営業活動の展開 1. ホームページにおける情報の内容の充実、メールマガジンの配信、携帯電話での情報発信 (1) アクセス件数 日本芸術文化振興会ホームページの年間アクセス件数:2,306,557 件／目標 1,950,000 件(達成度118.3%)(内、47,945 件が携帯電話からのアクセス) 国立劇場おきなわホームページの年間アクセス件数:259,376 件／目標 206,000 件(達成度 125.9%) ・ ページ作成、アクセス分析などの運用支援及びサイトの保守業務を一体として業者に委託することにより、ホームページの内容の充実・効果的な配信を行った。 ・ アクセス分析ソフトを導入し、振興会サイト全てのページを随時、状況に合わせて分析した。				・メールマガジンの配信やホームページの内容の充実など、インターネットを活用した広報活動は評価できる。ホームページのアクセス件数は、昨年度に比べて、日本芸術文化振興会で約 306,000 件増、国立劇場おきなわで約 45,000 件増と、ともに増加してお		

利用状況を把握し、より効果的なホームページ運用に努めたか。メールマガジンの記事内容等を見直し、読者数増や集客効果の向上を図ったか。 - 日本芸術文化振興会ホームページの年間アクセス目標:1,950,000 件 - 国立劇場おきなわホームページの年間アクセス目標:206,000 件 b. 次のとおり広報誌を定期的に発行したか。 - 日本芸術文化振興会ニュース(毎月発行) - 国立劇場おきなわ情報誌「華風」(毎月発行) c. 公演内容に応じた効果的な宣伝活動を実施したか。 d. シーズンシートやセット券等による販売を推進したか。 e. 学校・旅行代理店・ホテル・独立行政法人国際観光振興機構等の担当者に向けた劇場説明会を実施する等連携を強化して、団体観劇の促進と外国からの旅行者を含めた鑑賞者の増加を図ったか。団体観劇のメールによる問い合わせを随時可能とするなど、新規顧客に対する営業を強化し、また、全職員が集客に対する意識を高め、知人や関係するコミュニティ等に対して積極的に団体観劇を勧誘する「おすすめキャンペーン」を引き続き実施したか。 イ 会員組織の会員に対し、会報による情報提供、会員先行発売及び割引発売、催し物を実施するとともに、引き続き会員を募集し、観劇機会の一層の増加を図ったか。また、アンケート調査を	(2) ホームページの内容の充実、使いやすさの向上 - 振興会ホームページについては、公演情報をはじめとし、トピックス情報などより広範な情報の追加・更新等について柔軟かつ迅速に実施し、新鮮な情報を多数提供することで、飽きのこないホームページを目指した。これによりリピーターによるアクセス数を増大させるとともに、検索サイトの検索結果でより上位に表示させる効果の向上を図った。 - 振興会ホームページについては、引き続きホームページの更新作業を内部で処理し、休演者情報の掲載等について、柔軟かつ迅速に実施した。 - ホームページ上でアピール効果の高いプロモーションエリアを積極的に活用することにより、利用者にとって見やすく、探しやすい情報提供に努めた。 - 国立劇場開場 45 周年の際に培った特設サイトの効果を応用し、公演の魅力が伝わるよう、10 月・3 月歌舞伎公演で特設サイトを作成した。 - 能楽堂の公演情報として、早期(23 年 1 月)に 23 年度の全主催公演の番組を掲載し、団体観劇の受付を開始して、集客を図った。 (3) メールマガジンの配信 - 国立劇場のメールマガジンの配信(月 2 回、必要に応じて臨時配信)を行い、公演情報、公演に関するイベント、その他事業等の広範な情報を掲載するなど内容の充実に努め、タイムリーな広報を行った。メールマガジン会員数は、前年度から9,955 人増加し 3 月末で 36,886 人となった。 - 国立劇場おきなわメールマガジン会員数は、533 人(25 年 3 月末) 2. 広報誌の発行 一般向け広報誌として、日本芸術文化振興会ニュース、国立劇場おきなわ情報誌「華風」を毎月発行したほか、会員組織の会員に対し会報による情報提供を行った。 また、以下の概要等を作成した。 「独立行政法人日本芸術文化振興会概要(日本語)」(24 年 8 月作成) 「独立行政法人日本芸術文化振興会概要(英語)」(24 年 10 月作成) 「独立行政法人日本芸術文化振興会要覧」(24 年 10 月作成) 「独立行政法人日本芸術文化振興会年報 平成 23 年度」(24 年 12 月作成) 「公益財団法人国立劇場おきなわ運営財団要覧」(25 年 3 月作成) 3. 公演内容に応じた効果的な宣伝、営業活動 (本館) 10 月歌舞伎公演「塩原多助一代記」では、ゆかりの地、群馬県みなかみ町町内全戸に公演チラシ配布がみなかみ町の協力で実現し、周知に努めた他、9 代目子孫塩原文雄氏や炭の関連団体等に対しての宣伝、営業活動を行った結果 6 件 290 枚の実績を得た。三遊亭圓朝の作であることから円朝祭り(8 月 5 日開催 台東区谷中コミュニティセンター前広場)での 10 月公演チラシ配布、入場券(2 等B席)販売を実施(販売枚数 11 枚)。 「親子で楽しむ歌舞伎教室」において、24 年度から埼玉県教育委員会の協力により、学校を通じて県内の小学校高学年及び中学生(小中学校 160 ヶ所、教育委員会等 64 ヶ所)に公演チラシを配布した結果、「親子で楽しむ歌舞伎教室」は全日程ほぼ売切れとなり、相乗効果として「社会人のための歌舞伎鑑賞教室」も高い収入率を上げるなど結果を残した。 (能楽堂)	り、高く評価できる。 - チラシやポスターなどの広報媒体は、一般の眼にふれやすい効果的なものになっており、文楽劇場や国立劇場おきなわでのキャンペーンやパネル展示なども評価できる。 - あぜくら会会員数は目標に対し△171 名で達成度 99.0%であるが、文楽劇場友の会は達成度 102%、おきなわ友の会は達成度 141.5%と会員数の着実な増加に取り組んでいる。
---	---	---

適宜実施し、回答内容について検討の上、会員サービスの一層の充実を図ったか。 a. あぜくら会(本館・演芸場・能楽堂) ・ 会報「あぜくら」(毎月発行) ・ 会員向け催事: 年 6 回程度 ・ 目標会員数: 17,800 人 b. 文楽劇場友の会 ・ 「文楽劇場友の会会報」(年 6 回発行) ・ 会員向け催事: 年 6 回程度 ・ 目標会員数: 7,500 人 c. 国立劇場おきなわ友の会 ・ 「国立劇場おきなわ友の会会報」(年 4 回発行) ・ 会員向け催事: 年 3 回程度 ・ 目標会員数: 1,550 人	・ チラシ、ポスター、ホームページ、広報誌等による通常の広報とともに、公演によっては企画性を周知するため、特別チラシや特別パンフレットを作成するほか、ホームページにトピックス等を掲載した。 ・ 12 月 19 日(水)には 25 年度の演目決定をうけて演目、30 周年の企画発表記者会見を実施した。 ・ 25 年 4 月特別企画公演・新作能「世阿弥」では、 特別ポスター 100 枚、特別チラシ 20,000 枚を作成・配布。 1 月 23 日(水)京都観世会館能舞台において新作能「世阿弥」試演会及び制作発表を開催。 出席者: 梅原猛、梅若玄祥、片山九郎右衛門ほか ホームページにトピックス等を掲載。 新作能「世阿弥」試演会及び制作発表レポートを掲載(HP トピックス) 新作能「世阿弥」稽古レポートを掲載(HP トピックス) 以上の宣伝・広報に努めた結果、公演前の掲載・放送等は、新聞記事は主要 6 紙すべてを含む 11 件、雑誌記事 2 件であった。 (文楽劇場) ・ 文楽劇場では、公演宣伝キャンペーンを積極的に行い、マスコミへの情報提供等多様な広報活動を展開した。 6 月 25 日 夏休み文楽特別公演『曾根崎心中』(大阪 露天神社) 報道 12 社取材 7 月 19 日 夏休み文楽特別公演(JR 大阪駅南口旧砂時計広場) 報道 9 社取材 10 月 23 日 11 月文楽公演『仮名手本忠臣蔵』(JR 大阪駅(大阪ステーションシティ)「時空(とき)の広場」) 報道 8 社取材 10 月 24 日 11 月文楽公演『仮名手本忠臣蔵』(京都「一力亭」及び岩屋寺) 報道 8 社取材 11 月 2 日 11 月文楽公演『仮名手本忠臣蔵』(地下鉄心斎橋駅構内) 報道 7 社取材 3 月 16 日 4 月文楽公演(阪急百貨店うめだ本店「祝祭広場」) 報道 7 社取材 (国立劇場おきなわ) ・ 新聞、雑誌等における広告及び県内自治体、学校等へのチラシ配布を継続的に行いながら、沖縄県庁(8 月 27 日～8 月 31 日)や那覇市内デパートでのポスター展(12 月 27～1 月 7 日)により幅広い広報宣伝を行った。 ・ 日本復帰 40 周年にちなみ、復帰世代が多く出演する、4 月琉球舞踊公演「新進舞踊家の会」及び 7 月三線音楽公演「琉球弧の島唄」を、「本土復帰 40 周年記念公演」と銘打ち、本土復帰とともに育ってきた出演者による記者発表を行うなど、広報宣伝活動に務めた。 ・ 21 年 5 月から行っているラジオ番組の生コマーシャルを継続して行い、自主公演出演者の協力による公演の宣伝に取り組んだ。 ・ ホームページによる公演の見どころ紹介や、公演トピックスを昨年度に続き実施した。 ・ 1 月組踊公演「孝行竹壽之巻」及び 1 月琉球舞踊公演「新春琉舞名人選」の新春公演では、公演 3 日間計 350 名に呈茶を実施し、幕間に抽選による観客へのお年玉プレゼント(カレンダー、劇場グッズなどの詰め合わせ)を行い、初春公演の雰囲気盛り上げた。 ・ 6 月沖縄芝居公演「伊江島ハド一小」、10 月民俗芸能公演「多良間の八月踊り～塩川の芸能～」、2 月民俗芸能公演「沖縄本島民俗芸能祭(宜野座村)」及び 3 月企画公演「聞得大君誕生」では、公演にちなんだ地元の物産を販売する物産展やパネル展示、琉球伝統菓子の販売などを行い、地元の賑わいや琉球王府時代の雰囲気を演出し、公演を盛り上げた。	
---	---	--

	・ 3 月企画公演「新作組踊聞得大君誕生」では、前売開始前日(1/12)に、近郊 3 市 14 万世帯に新聞の折り込みを行った。 4. シーズンシートやセット券等の拡充 ・ あぜくら会会員向けに、10 月から 1 月の歌舞伎公演の各三日目の入場券(座席位置は 4 公演同一)をセットにした「三日目の会」の販売を行っている。4 公演の入場券を一度に購入できる利便性を一般にも適用するため、23 年度に引続き 24 年度も「三日目の会」の販売をあぜくら会会員に加え一般向けにも行った。加えて、3 月歌舞伎公演においても「三日目の会」に準じた販売方法を行い、あぜくら会員のチケット確保の一助とした。(10 月～1 月の 4 公演分 2,204 枚) ・ 昼夜セット割引や通し割引を公演形態に合わせて実施した。歌舞伎 4 公演特別セット券の販売を限定ステージで行った(10 月～1 月の 4 公演分 148 枚)。また、短期公演でも内容の異なる 2 回公演の場合は、同時に購入すると割引となるセット割引を行った(8 月舞踊 22 枚、11 月舞踊 58 枚、3 月舞踊 8 枚、11 月声明 125 枚、6 月民俗芸能 188 枚)。 ・ 親子を対象とする公演において、親子セットの割引料金を設定して好評を得た。 ・ 文楽劇場では、一演目だけを鑑賞する幕見席の販売を引き続き行い、好評を得た。 5. 団体鑑賞の促進、外国からの旅行者を含めた鑑賞者の増加 ・ 外部の旅行代理店(JTB)が発信する外国人旅行者向けのホームページにて、国立劇場歌舞伎公演の告知及び、チケットのインターネット受付をし、合計 90 枚の販売実績となった。(3/21 現在) <2>会員組織による観劇機会の増加 1. あぜくら会 (1) 会員向けサービスの充実 ・ あぜくら会では、催し物に参加できなかった会員のために、振興会ホームページ上の会員向けページに催し物リポートを掲載しているが、パソコンを持っていない会員のために、会報にもリポートを掲載するように努めた。 ・ 10 月歌舞伎公演 三遊亭円朝＝口演「塩原多助一代記」に向けて、ジャンルを超えた公演宣伝の一環として、演芸家の立場からの作品解説や落語・講談で作品の雰囲気味わってもらおう公演を試みた。 ・ 催し物参加者の希望があった、講演当日の読み物(パンフレット)を毎回作成できるように努めた。 ・ 今後の会員サービスについての参考とするために、モニター調査を実施した。当選者に事前アンケートした資料を基に、9 月 12 日(水)文楽公演、10 月 12 日(金)演芸場中席公演、11 月 12 日(月)歌舞伎公演を観劇してもらうとともに、事前に行ったアンケートを参考にしたグループインタビューを実施した。 (2) 会報の発行(計画:毎月発行) 「あぜくら」を毎月 25 日に発行した(計 12 回)。 (3) 会員向け催事(計画:6 回程度実施) 「あぜくらの集い」を 5 回実施し、参加者数は 676 人となった。 1.「円朝と歌舞伎と塩原多助」 8 月 20 日(月)18:00、国立演芸場、参加者数 213 人(応募者 231 人、当選者 231 人) 出演＝金原亭馬生(落語家)、一龍斎貞友(講談師)、高野実貴雄(日本文化研究者)	
--	--	--

	アンケートの実施:回答数 66 人(配布数 213 人、回答率 31%) 2.「四天王寺の聖霊会について」 9 月 5 日(水)14:00、レクチャー室、参加者数 107 人(応募者 131 人、当選者 131 人) 講演＝南谷美保(四天王寺大学教授) アンケートの実施:回答数 49 人(配布数 107 人、回答率 46%) 3.「吉田一輔を迎えて」 12 月 1 日(土)17:00、レクチャー室、参加者数 123 人(応募者 272 人、当選者 150 人) 出演＝吉田一輔、葛西聖司 アンケートの実施:回答数 80 人(配布数 123 人、回答率 65%) 4.「管絃－壱越調と平調－」について 2 月 21 日(木)14:00、レクチャー室、参加者数 101 人(応募者 209 人、当選者 130 人) 出演＝豊英秋、安齋省吾、大窪永夫 アンケートの実施:回答数 85 人(配布数 101 人、回答率 84%) 5.「復曲素浄瑠璃を聞く会」－復曲の現場に立ち会－ 3 月 18 日(月)14:00、レクチャー室、参加者数 132 人(応募者 374 人、当選者 120 人) アンケートの実施:回答数 95 人(配布数 132 人、回答率 72%) (4) アンケート調査 ・「あぜくらの集い」について毎回アンケート調査を行った。(配布数 676 枚、回答数 375 枚) ・アンケート結果として、「あぜくらの集い」は好評で継続を望む声が多く、開催数・開催内容・多人数が参加できる会場での開催を希望する意見もあった。 (5) 会員数 <table border="1" data-bbox="714 839 1572 908"> <tr> <td>在籍者数 (対前年度)</td><td>目標会員数</td><td>利用枚数</td></tr> <tr> <td>17,629 人 (+192 人)</td><td>17,800 人</td><td>92,019 枚</td></tr> </table> 2. 文楽劇場友の会(文楽劇場) (1) 会員向けサービスの充実 ・ 会員に対し、チケット発売日等広報のメールを毎月発信し、購買数拡大に努めた。 ・ 好評の観劇ラリーを本年も実施し、年間 4 回の文楽公演の入場券を購入した会員に記念品を進呈した(1,032 名)。 ・ 本年も夏休み文楽公演において会員が引率する子供料金、学生料金を設定、販売した。 ・ 会員数増のための対策について、入会申込書のリニューアルや申込書設置場所の増設、会員特典の告知のほかに、申込時のプレゼント見本(解説書 1 冊・お食事割引券 1 枚進呈)の掲示を行い、入会促進を図った。また、「文楽のつどい」のスナップ写真等を場内やホームページに掲出し、友の会の魅力を強調した。 (2) 会報の発行(計画:年 6 回発行) 「文楽劇場友の会会報」を 4、5、7、9、11、2 月に発行した(計 6 回)。 (3) 会員向け催事(計画:4 回程度実施) 「文楽のつどい」を 4 回開催し、参加者は 454 人となった。 1.「夏休み文楽公演にちなんで」 7 月 3 日(火)18:30、国立文楽劇場小ホール、参加者数 146 人(応募者 182 人、当選者	在籍者数 (対前年度)	目標会員数	利用枚数	17,629 人 (+192 人)	17,800 人	92,019 枚	
在籍者数 (対前年度)	目標会員数	利用枚数						
17,629 人 (+192 人)	17,800 人	92,019 枚						

182 人)

内容:夏休み文楽特別公演「伊勢音頭恋寝刃」にちなみ、神戸女子大学古典芸能研究センター長阪口弘之氏の講演及び松永源六郎(刀匠)と吉田玉女(文楽人形遣い)との対談を実施。

2.「文楽列車」

10 月 28 日(日)、参加者数 50 人(応募者 152 人、当選者 50 人)

内容:近畿日本鉄道(株)主催の「文楽列車」に「文楽のつどい」として参加した。車内で文楽人形(吉田簗二郎・桐竹紋臣)とふれあい、吉野山ふるさとセンターでの文楽ミニ公演を鑑賞した。

3.「初春文楽公演にちなんで」

12 月 18 日(火)14:00、国立文楽劇場 1 階レストラン「文楽茶寮」、参加者数 74 人(応募者 214 人、当選者 75 人)

内容:初春文楽公演「義経千本桜」(すしやの段)にちなんだお話「すしやの段となれ寿司」及び文楽技芸員(豊竹呂勢大夫・鶴澤清介・吉田一輔)による茶話会「文楽よもやま噺」を実施。

4.「4 月文楽公演にちなんで」

3 月 27 日(水)18:30、国立文楽劇場小ホール、参加者数 184 人(応募者 274 人、当選者 220 人)

内容:4 月文楽公演「心中天網島」にちなみ、西野由紀(天理大学准教授)のお話「心中天網島と大坂の町並み」と、長尾多栄ほかの端唄等の演奏を交えた鶴澤寛治(文楽三味線)のお話「今は昔 北の新地の情緒」。

(4) アンケート調査

- ・ 3 月 27 日の「文楽のつどい」においてアンケート調査を行った。(配布数 184 枚、回答数 154 枚)
- ・ アンケート結果として、内容について 92.2%(142 人)の方々から「満足」の回答を得た。今後の希望については技芸員による対談・座談会を望む声が多かった。

(5) 会員数

在籍者数 (対前年度)	目標会員数	利用枚数
7,651 人 (229 人)	7,500 人	23,316 枚

3. 国立劇場おきなわ友の会

(1) 会員向けサービスの充実

前年度に引き続き、チケット購入時に押されるスタンプをためて割引券などがもらえるポイントカード制度や、会員対象の講演会・バスツアーを実施した。

(2) 会報の発行(計画:年 4 回発行)

「国立劇場おきなわ友の会会報」を 6、9、1、3 月に発行した(計 4 回)。

(3) 会員向け催事(計画:3 回程度実施)

年 3 回実施し、参加者数は 116 人となった。

1.「友の会バスツアー南部歌碑めぐり」(10 月 13 日 参加者数 39 人)

垣花武信氏を講師に、貸切バスにて沖縄南部の歌碑(石川正通の碑・花風の港の碑・手水の縁の碑・白浜節の碑・汗水節の碑・兄弟小節の碑)を回った。

	2.「友の会半日バスツアー＆公演鑑賞」(12月8日、参加者35人) NPO 法人うらおそい歴史ガイドの仲間孝蔵氏をガイドに、玉陵・首里城公園と浦添ようどれ館を見学後、劇場に戻り自主公演「創作舞踊」を鑑賞した。 3.「友の会新春講演会」(於国立劇場おきなわ小劇場、2月9日、参加者42名) (公財)国立劇場おきなわ運営財団常務理事の宜保榮治郎が講師を努め、組踊の楽しみ方等を解説した。また若手実演家の玉城匠氏と平田旭氏が助手(実演)を努めた。 (4) アンケート調査 ・「友の会バスツアー南部歌碑めぐり」(配布数39枚、回答数29枚)28人の参加者が満足・概ね満足と回答した。 ・「友の会半日バスツアー＆公演鑑賞」(配布数35枚、回答数31枚)30人の参加者が満足・概ね満足と回答した。 ・「友の会新春講演会」(配布数42枚、回答数38枚)33人の参加者が満足・概ね満足と回答した。 (5) 会員数 <table border="1"> <tr> <th>在籍者数 (対前年度)</th><th>目標会員数</th><th>利用枚数</th></tr> <tr> <td>2,193人 (+536人)</td><td>1,550人</td><td>3,903枚</td></tr> </table> 《数値目標の達成状況》 【ホームページへのアクセス状況】 日本芸術文化振興会ホームページの年間アクセス件数:2,306,557件／目標 1,950,000件(達成度118.3%) 国立劇場おきなわホームページの年間アクセス件数:259,376件／目標 206,000件(達成度125.9%) 【会員数】 あぜくら会:17,629人／目標 17,800人(達成度99.0%) 国立文楽劇場友の会:7,651人／目標 7,500人(達成度102.0%) 国立劇場おきなわ友の会:2,193人／目標 1,550人(達成度141.5%) 《自己点検評価》 ○ 良かった点・特色ある点 ・ あぜくら会では、催し物に参加できなかった会員のために、振興会ホームページ上の会員向けページに催し物リポートを掲載しているが、パソコンを持っていない会員のために、会報にもリポートを掲載するように努めた。 ・ 10月歌舞伎公演は「塩原多助一代記」は落語がもとになっていることから、ジャンルを超えた宣伝の一環として、演芸家の立場からの作品解説を行ってもらうとともに、「塩原多助一代記」の落語・講談を聴いていただき、この作品の雰囲気味わってもらう講演を実施した。 ・ 催し物参加者から希望があった、講演当日の読み物(パンフレット)を毎回作成するよう努めた。 ・ 「文楽のつどい」の開催や、演目ゆかりの地キャンペーンを積極的に行った。また、年間公演の観劇ラリーを実施し、好評を博した。 ・ 国立劇場おきなわでは、特別企画公演「聞得大君誕生」の効果により、大幅におきなわ友の会の	在籍者数 (対前年度)	目標会員数	利用枚数	2,193人 (+536人)	1,550人	3,903枚	
在籍者数 (対前年度)	目標会員数	利用枚数						
2,193人 (+536人)	1,550人	3,903枚						

	会員数が増えた(22 年度 1,445 人、23 年度 1,657 人、24 年度 2,193 人)。 ○ 見直し又は改善を要する点 ・ ホームページのアクセス分析を充実し、アクセス増や、ホームページの改善に一層努める。	
--	--	--

【(中項目)1-2-2】	現代舞台芸術の公演	【評定】				
		A				
		H20	H21	H22	H23	
		A	A	A	A	
【(細目)1-2-2-①】	現代舞台芸術の公演	【評定】				
		A				
		H20	H21	H22	H23	
		A	A	A	A	
【法人の達成すべき計画】		実績報告書等 参照箇所				
2 伝統芸能の公開及び現代舞台芸術の公演〔現代舞台芸術の公演〕		業務実績報告書 80 頁～112 頁				
国際的に比肩し得る高い水準の現代舞台芸術を自主制作により公演するものとし、中期目標の期間中以下のとおり現代舞台芸術の公演を行う。						
ア オペラ公演						
名作と呼ばれる代表的な作品を上演するとともに、上演機会の少ない優れた作品や日本の作曲家の作品の上演にも努め、それらをレパートリーとして蓄積し、繰り返し上演することにより、オペラの振興と普及を図る。年間 13 公演程度実施する。						
イ バレエ公演						
スタンダードな演目を多彩なキャストで上演し、観客層の拡大に努めるとともに、国内外の振付家による質の高い新国立劇場のオリジナル作品の企画・上演にも努め、それらをレパートリーとして蓄積し、繰り返し上演することにより、バレエの振興と普及を図る。年間 6 公演程度実施する。						
ウ 現代舞踊公演						
特徴あるスタイルを持つ振付家による斬新な企画や内外で高い評価を得ている公演等を実施し、現代舞踊の振興と普及を図る。年間 4 公演程度実施する。						
エ 演劇公演						
新作上演を企画・発信するとともに、我が国で創作された作品の再評価や海外の優れた作品の紹介、地域で活躍する劇団等との交流に努め、現代演劇の振興と普及を図る。年間 9 公演程度実施する。						
【インプット指標】						
(中期目標期間)		H20	H21	H22	H23	H24
オペラ		収入 934	収入 1,031	収入 891	収入 843	収入 1,049
決算額(百万円)		支出 1,323	支出 1,524	支出 1,381	支出 1,275	支出 1,245
オペラ		7	7	7	6	4
従事人員数(人)						
バレエ		収入 339	収入 345	収入 258	収入 352	収入 292

決算額(百万円)	支出 568	支出 565	支出 471	支出 578	支出 457
バレエ 従事人員数(人)	7	7	7	6	4
現代舞踊 決算額(百万円)	収入 23 支出 60	収入 25 支出 56	収入 19 支出 56	収入 28 支出 57	収入 29 支出 56
現代舞踊 従事人員数(人)	7	7	7	6	4
演劇 決算額(百万円)	収入 249 支出 362	収入 244 支出 353	収入 218 支出 330	収入 287 支出 350	収入 307 支出 334
演劇 従事人員数(人)	7	7	7	6	4

- 1) 決算額は、各ジャンルの入場料収入及び公演費を計上している。
2) 従事人員数は、新国立劇場・おきなわ部管理課新国立劇場系の常勤職員の人数を計上している。
その際、役員及びその他の職員は勘案していない。

評価基準(年度計画及び評価の視点)	実績								分析・評価
2 伝統芸能の公開及び現代舞台芸術の公演 (2) 現代舞台芸術の公演 現代舞台芸術の振興普及を図るため、中期計画の方針に従い、平成 24 年度年度計画[別表 2]のとおり主催公演を実施したか。 [平成 24 年度年度計画別表 2 の概要] (2)現代舞台芸術の公演 ①オペラ 11 公演 ②バレエ 7 公演 ③現代舞踊 4 公演 ④演劇 8 公演	1. 公演実績								・バレエでは、7公演中4公演で目標入場者数に達せず、全体でも未達であったが、オペラ、現代舞踊、演劇では、入場者数の目標を達成した。 ・オペラでは、「ヴェルディ＆ワーグナー生誕200年祭」に参加し、共同でプロモーションを行ったり、英国をテーマにした「英国舞台芸術フェスティバル」をオペラ・演劇・バレエ共同で行うなど、新しい試みを実施した。 ・バレエでは、新制作の「シルヴィア」や「ダイナミックダンス」など世界的潮流に見合う新風を吹き込もうとした。また、「dance to the future」は、古典バレエと現代舞踊の垣根を低くする有意
	分野名	劇場	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数	
	オペラ	11 公演 オペラ劇場、中劇場	実績	55 回	55 日	78,872 人	(81.2%)	97,091 人	
			計画	55 回	55 日	74,260 人	(76.1%)	97,522 人	
	バレエ	7 公演 オペラ劇場、中劇場	実績	40 回	36 日	43,957 人	(70.9%)	61,994 人	
			計画	40 回	36 日	44,900 人	(72.4%)	61,994 人	
	現代舞踊	4 公演 中劇場、小劇場	実績	17 回	15 日	6,024 人	(82.3%)	7,324 人	
			計画	16 回	16 日	5,310 人	(74.9%)	7,088 人	
	演劇	8 公演 中劇場、小劇場	実績	164 回	145 日	61,325 人	(85.0%)	72,118 人	
			計画	164 回	145 日	51,400 人	(74.1%)	69,328 人	
現代舞台芸術 合計	30 公演	実績	276 回	251 日	190,178 人	(79.7%)	238,527 人		
		計画	275 回	252 日	175,870 人	(74.5%)	235,932 人		

	《自己点検評価》 ○ 良かった点・特色ある点 ・ オペラでは、新制作公演として 2013 年に生誕 200 周年を迎えるワーグナーの名作「ローエングリン」、ベルギー・モネ劇場からのプロダクションレンタルによりブリテン作曲の「ピーター・グライムズ」等を上演した。特に、「ピーター・グライムズ」の上演は、各方面から大変高い評価を得、新国立劇場にとって大変意義深い成果となった。 ・ バレエでは、ビントレー芸術監督自身がドリープの美しいバレエ音楽に振付け、ダンサーの高度な技術と音楽性、そして巧みなストーリー展開により観客を魅了する「シルヴィア」を上演した。また、監督就任後最初のシーズンに上演直前まで至りながら東日本大震災によりやむなく中止となった「ダイナミック ダンス！」について、24 年度に念願の上演が叶い、新国立劇場バレエ団が再び挑戦して、高い評価を得た。 ・ 現代舞踊では、平山素子、中村恩恵、金森穰という日本を代表する作家の作品を新国立劇場バレエ団が踊り、バレエと現代舞踊の融合を試みるという新国立劇場ならではの企画である「DANCE to the Future」、森山開次の意欲作「曼荼羅の宇宙」などを上演し、高い評価を得た。 ・ 演劇では、2009 年秋に三部作同時上演で演劇界の話題をさらった「ヘンリー六世」に続く「リチャード三世」、新訳上演の「サロメ」及び「るつぽ」、海外の話題作「負傷者 16 人」、子どもも楽しめる作品を目指した「音のいない世界」等、いずれも意欲的に取り組み、ほとんどの作品において集客も好調で、新国立劇場の演劇ならではの意義のある公演を行うことができた。 ・ 震災の影響によるキャスト変更もあったものの、大きな混乱はなく、公演に対する観客の満足度も非常に高かった。 ○ 見直し又は改善を要する点 ・ バレエについては、分野全体で目標入場者数を達成できなかった。要因を分析し、バレエの観客層の拡大に努めていく。 ○ 見直し又は改善を要する点 ・ バレエ公演はオペラ公演同様、シーズンセット券が主要な販売チャンネルであるが、23 年度に続き震災の影響などにより同セット券の販売が伸び悩んだことで苦戦を強いられた。今後も、芸術監督の振り付けによる現代作品を基調とする新しい演目の広報等を強化し、芸術監督の意向・芸術観、演目への観客の理解度・認知度の向上と興味喚起を図る一方、個々の演目については作品の魅力や出演者の魅力を効果的に発信し、多くの人々の期待感を醸成して、鑑賞行動に結び付くよう努め続けていきたい。また、演目の選定に当たっても、レパートリーの幅を広げる工夫をしながら、人気古典演目を取り入れていくことで、バレエ公演全体としての入場率を上げていきたい。 2ー(2)ー① オペラ 1. 公演実績 <table><tr><th>公演名</th><th>劇場</th><th>期間</th><th>区分</th><th>回数</th><th>日数</th><th>入場者数</th><th>入場率</th><th>総席数</th></tr><tr><td rowspan="2">「オテロ」</td><td rowspan="2">オペラ 劇場</td><td rowspan="2">4/1(日) ～ 13(金)</td><td>実績</td><td>5 回</td><td>5 日</td><td>5,959 人</td><td>(66.5%)</td><td>8,960 人</td></tr><tr><td>計画</td><td>5 回</td><td>5 日</td><td>6,300 人</td><td>(70.3%)</td><td>8,960 人</td></tr></table>	公演名	劇場	期間	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数	「オテロ」	オペラ 劇場	4/1(日) ～ 13(金)	実績	5 回	5 日	5,959 人	(66.5%)	8,960 人	計画	5 回	5 日	6,300 人	(70.3%)	8,960 人	義な企画であった。 ・現代舞踊は非常にレベルの高い公演が並んだが、やや出演の顔ぶれが固定しつつあるので、新たなスターの発掘を心掛けてほしい。 ・新国立劇場のオリジナル舞台「まほろば」の再演は、財産演目のレパートリー化への第一歩として成果を挙げた。 ・アンケート調査では、オペラ、バレエ、演劇で、90%を超える観客が概ね満足と回答していることは高く評価できる。今後は、回収率を上げる方策を検討し、調査結果の精度を上げてさらなる改善につなげられたい。 【オペラ】 ・公演は計画どおり実施されている。 ・入場者数は、11 公演中4公演で計画に対し未達であるが、全体としては目標を達成している。 ・特に、高校生のための鑑賞教室の入場者数は達成率 114.6%と高く、全体の入場者数を押し上げている。 ・アンケート調査で、有効回答数 6,057 人のうち 90.8%が「概ね満足」と回答している点は評価できる。
公演名	劇場	期間	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数																		
「オテロ」	オペラ 劇場	4/1(日) ～ 13(金)	実績	5 回	5 日	5,959 人	(66.5%)	8,960 人																		
			計画	5 回	5 日	6,300 人	(70.3%)	8,960 人																		

	「ドン・ジョヴァンニ」			4/19（木）～29（日）	実績	5 回	5 日	6,985 人	(78.0%)	8,960 人	・ヴェルディ、ワーグナーの記念の年に、オテロ、アイーダ、ローエングリン、タンホイザーなどゆかりの作品がラインナップされたが、新演出が1本だけにとどまっていることから、今後は、新演出をさらに増やし、海外からのレンタルや共同制作も含め、劇場全体の活性化を図ることが期待される。
	「ローエングリン」 （新制作）			6/1（金）～16（土）	計画	5 回	5 日	6,700 人	(74.8%)	8,960 人	
	「ピーター・グライムズ」 （新制作）			10/2（火）～14（日）	実績	6 回	6 日	9,418 人	(87.6%)	10,752 人	
	「トスカ」			11/11（日）～23（金）	計画	6 回	6 日	8,300 人	(77.2%)	10,752 人	
	「セビリアの理髪師」			11/28（水）～ 12/9（日）	実績	5 回	5 日	6,238 人	(71.2%)	8,758 人	
	「タンホイザーとヴァルトブルクの歌合戦」			11/11（日）～23（金）	計画	5 回	5 日	6,500 人	(72.5%)	8,960 人	
	「愛の妙薬」			11/28（水）～ 12/9（日）	実績	5 回	5 日	7,550 人	(86.5%)	8,727 人	
	「アイーダ」			11/28（水）～ 12/9（日）	計画	5 回	5 日	7,200 人	(80.4%)	8,960 人	
	「ドン・ジョヴァンニ」 （演奏会形式）			1/23（水）～ 2/5（火）	実績	5 回	5 日	6,919 人	(77.2%)	8,960 人	
				1/23（水）～ 2/5（火）	計画	5 回	5 日	6,300 人	(70.3%)	8,960 人	
				1/23（水）～ 2/5（火）	実績	5 回	5 日	5,777 人	(64.5%)	8,960 人	
				1/23（水）～ 2/5（火）	計画	5 回	5 日	6,300 人	(70.3%)	8,960 人	
				1/31（木）～ 2/12（火）	実績	7 回	7 日	11,762 人	(93.8%)	12,544 人	
				1/31（木）～ 2/12（火）	計画	7 回	7 日	10,500 人	(83.7%)	12,544 人	
				4/3 日（火）	実績	1 回	1 日	564 人	(63.7%)	886 人	
				4/3 日（火）	計画	1 回	1 日	660 人	(74.5%)	886 人	
			4/3 日（火）	実績	49 回	49 日	68,561 人	(79.3%)	86,467 人		
			4/3 日（火）	計画	49 回	49 日	65,260 人	(75.1%)	86,902 人		
			4/3 日（火）	実績	6 回	6 日	10,311 人	(97.1%)	10,624 人		
			4/3 日（火）	計画	6 回	6 日	9,000 人	(84.7%)	10,620 人		
			4/3 日（火）	実績	6 回	6 日	10,311 人	(97.1%)	10,624 人		
			4/3 日（火）	計画	6 回	6 日	9,000 人	(84.7%)	10,620 人		
			4/3 日（火）	実績	55 回	55 日	78,872 人	(81.2%)	97,091 人		
			4/3 日（火）	計画	55 回	55 日	74,260 人	(76.1%)	97,522 人		

2. 営業・広報

- ・ セット券購入の観客はオペラの最重要顧客であるとの位置づけの下、2012/2013シーズンセット券の販売を実施した。
- ・ 空席のある場合に限り事前に5,000円で予約できる25歳以下の若年層を対象とした「アカデミック・プラン」を昨年度に引き続き実施するとともに、26歳以上39歳以下の年齢層を対象に、「アカデミック39」を新たに立ち上げた。
- ・ マスコミ各社への取材依頼、ポスター、チラシ、インターネット、ジ・アトレ会報等により、

【バレエ】

- ・公演は計画どおりに実施された。
- ・こどものための公演は、入場者数の目標達成度が124.0%と極めて高い。
- ・入場者数は、6公演中4公演で計画に対し未達であり、全体でも達成度は97.9%にとどまっている。
- ・一般に「バレエは古典」という考え方が根強く、知名度の低い作品は入場率が下がる傾向にあるが、さらに要因分析が必要である。
- ・アンケート調査で、有効回答数は1,940 人と少ないものの、93.3%が「概ね満足」と回答しており、評価できる。
- ・新制作の「シルヴィア」は古典的な演出ながら、独創的な振り付けに現代性があり、様式美にあふれた優雅な舞台だった。
- ・また、「ダイナミック・ダンス」は入場率

2. 営業・広報

- ・ セット券購入の観客はオペラの最重要顧客であるとの位置づけの下、2012/2013シーズンセット券の販売を実施した。
- ・ 空席のある場合に限り事前に5,000円で予約できる25歳以下の若年層を対象とした「アカデミック・プラン」を昨年度に引き続き実施するとともに、26歳以上39歳以下の年齢層を対象に、「アカデミック39」を新たに立ち上げた。
- ・ マスコミ各社への取材依頼、ポスター、チラシ、インターネット、ジ・アトレ会報等により、

	公演の周知を図り、集客に努めた。 ・ 開場15周年にあたる24年度、2012/2013シーズンの開幕公演として、オペラ「ピーター・グライムズ」、バレエ「シルヴィア」、演劇「リチャード三世」と、3部門とも英国ゆかりの作品を上演した。このことから、ブリティッシュ・カウンシルとの共催により、英国をテーマに舞台芸術の普及を図る企画「新国立劇場・英国舞台芸術フェスティバル2012」を劇場を挙げて開催した。期間中は特設サイトを開設して随時情報を発信、同フェスティバルの関連企画として、英国大使館で記者発表を行うとともに、その模様を動画中継システム（USTREAM）により配信した。各演目や英国の文化芸術に関連する各種の講座、トークセッション、展示、上映会、装飾等を実施し、関心を刺激するとともに活気に満ちた空間で来場者を迎えた。 ・ 2013年がヴェルディとワーグナーという2大作曲家の生誕200年に当たることから、国内外有数のオペラ団、オーケストラ等が一同に会し、1年間にわたって共同プロモーションを行う「2013ヴェルディ＆ワーグナー生誕200年祭」に参加した。共同でのチラシ作成、フェイスブック開設のほか、同祭の関連企画として、新国立劇場オペラ劇場ホワイエにおいて同祭の「キックオフ記者発表」を実施、その模様を動画中継システム（USTREAM）により配信した。国際連携プロジェクトなど各種イベントとの連携を図り、両作曲家に関連する各種のイベント、展示等を展開し、観客の関心を刺激するとともに祝祭的雰囲気醸成した。 ・ 演目別の広報については、様々な角度からアピールする方法を検討し、きめ細かいマスコミ対応による記事掲載の促進や、特設サイトにおける動画の活用をはじめとしたコンテンツの充実、eメールクラブ会員に対して公演関連情報や芸術監督のメッセージを送信するなど、観客向けのより詳細な情報を随時発信することで、多くの人々の期待感を醸成し、鑑賞へと結び付けた。 ・ さらに、24年度には新しく新国立劇場オペラフェイスブックアカウントを開設した。稽古の様子、公演準備の様子、チケット情報などを迅速かつ継続的に発信し、公演へのより一層の関心を喚起するとともにファン作りに努め、既存の観客にも好評を博するとともに、新規観客の開拓においても効果が期待されている。 ・ インターネットを活用した特設サイトの開設や動画掲載、他劇場での告知活動などを通じて、公演に対する注目度を向上させるとともに、期待感を高めることに努めた。 ・ インターネットに関連キーワードを入力すると新国立劇場の広告が自動的に表示される「検索キーワード連動型広告」というアプローチを行い、精密な営業活動を行った。 ・ 新国立劇場愛好者に対しeメールにて各種情報を提供、必要な情報を的確に周知し、顧客の利便性の向上に努めた。（eメールクラブ）。 3. 外部専門家等の意見 (1)公演全体について ・ 前期は、3本の本公演のうち新制作1本、ドイツもの2本とイタリアもの1本とバランス良く考えられ、ドイツものは、モーツァルトとワーグナーと安定確実路線で、公演水準も高かった。年間の並びのバランスであるが、あえて言うなら、平成23年度後期の「ルサルカ」のような公演がそこに1本入ると劇場の独自色を打ち出せるのではないかと。また2年目となるカバー歌手による演奏会形式公演は、今後企画が定着していくことが望まれる。（後期は）新国立劇場では初めてのイギリス・オペラとなる「ピーター・グライムズ」、2013年のヴェルディ＆ワーグナー・イヤーを記念した「アイーダ」と「タンホイザー」、イタリア・オペラ3本と手堅いラインナップで、ど	があまり伸びなかったものの、国際的に見ても最先端の表現を含む作品であり、斬新な企画であったことは評価できる。 ・再演はクラシックなレパートリーが並んだが、今後は、新国立劇場ならではの斬新な企画が望まれる。 【現代舞踊】 ・公演は計画どおりに実施され、入場者数は4公演中1公演で未達であるが、全体では目標を上回った。 ・新国立劇場のコンテンポラリー・ダンスの固定ファンが増えつつあることを評価したい。 ・旬のダンサーによって注目を集めるなど、評価を受けた。 ・現代舞踊は非常にレベルの高い公演が並んだが、やや出演の顔ぶれが固定しつつあるので、新たなスターの発掘を心掛けてほしい。 【演劇】 ・公演は計画どおりに実施された。 ・入場者数は、8公演中2公演で未達であるが、全体では達成度 119.3%で、目標に対し約 10,000 人増の成果は評価できる。
--	---	--

	の公演も充実していたが、演目としては「アイダ」以外は地味な印象で、集客においても少し寂しかったように感じた。「セビリアの理髪師」の賑やかで鮮やかな色彩の舞台や、「愛の妙薬」のシラゲーザの百戦錬磨の歌唱など、実際に劇場に足を運べば、誰もが満足できる公演だと思うが、まだそれが、劇場の外には十分に伝わってないのではないかな。 ・ シーズン10作品を見渡してみると、非常にバランスの良い配置の選曲であったと思う。3〜4年前に決めていたシーズン作品のはずだが、あの大震災や、ユーロ圏の危機的状況など予想も付かぬときであった。少し刺激がなさすぎの感もあるが、今となってみると、まるで現在の厳しい状況を予知していたかのように手堅い演目選びであったと思う。（2012/2013）シーズン終盤の3演目「オテロ」「ドン・ジョヴァンニ」「ローエングリン」は息をもつかせずグランドオペラで締めくくった。これぞオペラの醍醐味という楽しみをファンの方々に充分味わっていただく。そして、来シーズンへの期待をますます膨らませ、この劇場ならば期待どおり、いや、それ以上の上演をしてくれるに違いないと思っていただけの3作品の公演であった。（後期には）新国立劇場も15周年という節目の年を迎えたが、私の印象としてはもっと歴史のある劇場である。オペラ、舞踊、演劇、それぞれが高いレベルの主催公演を当たり前のように提供し続けている。その上演の内容を見たら、とても15年の歴史しかない、15年の経験だけであるとは思えないものだからだ。「ピーター・グライムズ」のような日本では上演の歴史もそれほどない作品も、「アイダ」や「タンホイザー」のような大作・名作も安心して楽しめる「我が街のオペラ劇場」に育っていると思う。 ・ この前期は新演出が「ローエングリン」くらいで再演主体となった。鑑賞教室や日中親善公演も含めて、有名作ばかり。こうなると歌手によりかかる部分が大きいわけで、「ドン・ジョヴァンニ」のクヴィエチェン、「ローエングリン」のフォークトと、外題役に男性スター歌手が登場したのが大きな特徴であった。オペラには色々な「柱」があるわけで、こうした中心のつくり方も大いに「アリ」だと思う。ただ、でき得ればかれらに匹敵するくらいのプリマ・ドンナが共演していると、もっと盛り上がったろうにと思った。 ・ 前期においては、新プロダクションに触れる前に、再演のステージについて述べておきたい。まず、マルトーネ演出の「オテロ」では、主人公の妄想としてデズデーモナが媚態を示す演技プランをかなり削っていたように思われたが、演技も難しく、解釈としても相当に込み入ったくだりではあるものの、再演を機に、違う演唱者の力量を得て新たな境地を示せたものとも想像されるので、できれば残しておいて貰いたかった。一方、アサガロフ演出の「ドン・ジョヴァンニ」では、初演時に感じた「衣裳の色合いと演者の個性との乖離」が解消され、題名役のクヴィエチェンのスター性もより強調される結果になった。このように、再演で「プロダクションの強み」に改めて感じ入ったことも、評者には今期の収穫の一つであった。ただし、この公演では指揮者のテンポの弄り方が恣意的に過ぎると思われたので、その点は改めて指摘しておきたい。それでは新制作の公演について。フォン・シュテークマン演出の「ローエングリン」では、エルザの幼児性&純粋さが徐々に脱皮&退行するくだりを、衣裳デザインのカモ也得て斬新に表現し得えた点と、合唱団が演じる「民衆」の無定見の様相を的確に描いた演出プラン、そしてシュナイダーの力強い指揮、主役カップルのフォークトとメルベートの総合的な表現力など、賞賛すべき点が多かった。再演も強く望みたい。それから、日中国交正常化40周年記念の「アイダ」も、ステージの飾りつけも含めて大いに楽しめたステージとして評価しておきたい。今後も機を捉えて、喉のテクニックを重要視する演目等で、演奏会形式による公演を鶴首する。また、カバーキャスト	・ 欧米の同時代の作品や、日本と西洋の演劇の出会いを新訳上演でさぐるシリーズ、子供向けの舞台の実現など、意欲的な企画上演が評価できる。 ・ 今後も、新国立劇場が様々な演劇の拠点となるよう、バラエティに富んだジャンル公演を企画するとともに、新制作プラス、レパートリーものの充実が望まれる。
--	---	--

による演奏会形式のステージも、若く可能性ある邦人勢を紹介する一助として、是非とも続けてもらいたい。特に今期は、研修所出身のバリトン与那城敬の名演ぶりと、指揮と弦楽アンサンブル&ピアノの演奏水準の高さに、重ねて賛辞を呈しておきたい。後期においては、「タンホイザー」の停滞気味の演出プラン&振り付けを除き、いずれの公演も総合的に高い水準を維持していた。特に「ピーター・グライムズ」での緻密な人物配置を絶賛しておきたい。続いて、キャスティングの面では、ミーガン・ミラー（「タンホイザー」）、レナート・ジローラミ（「愛の妙薬」）、ラトニア・ムーア（「アイーダ」）といった新しい顔ぶれが大成功を収めたことと、研修所出身の糸賀修平（「ピーター・グライムズ」）の代役起用が、適材適所の見本のごとき好演をもたらしたことに賛辞を呈したい。これからも、実力ある新進歌手&邦人勢の積極的な登用を望む次第である。また、中堅&ヴェテラン勢でも、マリアンナ・コルネッティ（「アイーダ」）の劇的なパワー、ニコル・キャベル（「愛の妙薬」）やダリボール・イエニス（「セビリヤの理髪師」）、ノルマ・ファンティーニ（「トスカ」）のエネルギッシュな表現力が、第一線で活躍するスター歌手たちのこの劇場に寄せる意気込みを象徴し、そのことも好ましく思われた。指揮者では、ミヒャエル・ギュットラー（「アイーダ」）の余裕のない進め方のみ惜しまれた。

・ 4月にモーツァルトの「ドン・ジョヴァンニ」6月にワーグナーの「ローエングリン」を鑑賞した。ともに優れた演奏と演出で訪れた鑑賞者を圧倒していたと言えよう。とりわけ後者に関しては近年まれに見る完成度で、こうした水準の高い作品を今後も制作していくことを望みたい。それにしても前者の「水の都ベニス」といい、後者の「スターウォーズ」風の舞台といい、これらのオペラを初めて見る観客は戸惑うばかりではなかろうか。仮にすでにかんりのオペラ通であっても、多くの「疑問符」が終演後に残ったはずである。新国立劇場には世界の最先端の舞台を提供するという役割とともに、より多くの観客にできあがった舞台とその作品のメッセージを正確に理解してもらうという役割もあるはずだ。丁寧な解説や図柄をつかってこれらの作品や演出を紹介していかないと、制作側の一方的なおしつけに終始してしまう可能性があるだろう。（後期は）再演公演はどれもが充実しており、安心して鑑賞することができた。優れた歌手を招聘すれば必然的に高い水準の舞台ができあがり、安定した成果を獲得することになる（その分、再演出を担当するスタッフには、苦労が増すわけであるが）。あまりアンサンブル性を必要としない作品はともかく、それとは対局にある演出の場合、時間をかけてじっくりと作り上げて行くことを望みたい。例えば、《タンホイザー》のタイトルロールがアンサンブルから浮き上がった場合などは、注意を要することになる。残念なのは、「再演」という形になるとこれを取り上げるメディアが極端に少なくなる、という事実である。この注目度の低下を防ぐ方法を考え出すことはできないであろうか。

(2)創作面について

・ 「ドン・ジョヴァンニ」のクヴィエチェンと「ローエングリン」のフォークト、世界的に活躍する2人の歌手がそれぞれ得意とするタイトル・ロールで出演した公演は、どちらもすばしかった。総合芸術とはいえ、やはり歌手あつてのオペラという思いを今回は強くした。また「ローエングリン」の美術・衣装を担当したロザリエのアーティスティックな仕事によって、これまで新国立劇場では鑑賞したことのない斬新な舞台が作られ、極めて刺激的だった。それと同時に、ヴェネツィアの運河が再現された「オテロ」もそうだが、演出家の発想を実現するために地道な準備を積み重ねていくスタッフの技術力の高さを改めて実感した。（後期は）新制作の「ピーター・グライムズ」が強く心に残った。排他的な集団社会の恐ろしさを強調したウィリー・デッカーの

演出と、タイトルロールのスチュアート・スケルトンの、荒々しさと細やかな心の動揺を丁寧に表現した歌唱は、胸を打った。フランコ・ゼッフィレリ演出の「アイーダ」の豪華絢爛な舞台は、新国立劇場の財産となる舞台で、引き継いでほしい。気になるのは、「タンホイザー」を演奏した東京交響楽団で、ワーグナーとなると演奏の質が落ちる。今年に限ったことではなく、毎年ワーグナー作品になると状態が良くない。オーケストラの問題ではあるが、オペラ全体の質に関わってくることなので、練習のコマを増やす等、改善の余地があれば話し合ってほしい。

・ 指揮陣はそれぞれジャン・レイサム＝ケーニック、エンリケ・マツォーラ、ペーター・シュナイダーという実力者、中でも「ローエングリン」のペーター・シュナイダーは豪華な顔ぶれのソリストたちをのびのびと歌わせて、圧巻の劇場音楽空間を創り出していた。招聘歌手の中には少し首をかしげる歌手も見られたが概ね満足行くものであったと思う。特に「ローエングリン」の歌手たちは素晴らしく（その中でもタイトルロール：フォークト）、この公演を観た観客は大きな満足感を得てお帰りになったのではないかと。招聘歌手に対し、日本人歌手たちの充実ぶりも特筆に価するものであったと思う。開場から15年、この間ヨーロッパ式に初日の4週間前から立ち稽古が始まり、その間完全拘束でオペラ創りに没頭するという、それまでの日本では不可能であった制作を実施し、日本人歌手たちにもプロ意識が根付いてきたということだろうか。こういう状況を見ると、そろそろ主役級や、作品によってはタイトルロールも歌ってもらいたいと、観客の方々も期待してきておられるのでは、と思った。（後期について）新国立劇場を取り巻く経済的環境は毎年厳しさを増していることと思う。オペラという、舞台芸術の華であり、あらゆる芸術ジャンルの全てを結集したようなものは、そもそも構造的に採算がとりにくいものだと思う。しかし、ここにはすべての舞台表現のものが詰め込まれている。オペラを極めることが、その他の舞台芸術の表現の枠を広げることにつながるのだと思う。そういった意味でも、新制作の公演が少なくなってきたことに不安を感じている。一方、再演が多くなっているわけだが、この場合何と言っても歌い手、キャスティングによる音楽的な楽しみが主になってくる。そうした中で今年も概ね適材適所のキャスティングができていたと思う。東京フィルハーモニー、東京交響楽団のオーケストラは劇場付きのオーケストラではないのだがそのことのマイナスより、常に真剣に取り組む、なれに陥らない新鮮さを感じさせてくれていると思う。そして毎回のように触れてきたが、何よりその面では合唱団の功績は大きいと思う。ファンの方々に新国立劇場のオペラはいつでも聴き応えがあると思っただいていてほしいと思う。

・ 新たな地平を切り開くという意味でも、今回の「ローエングリン」の舞台は充実していた。今シーズンのトップを飾るだけでなく、これまでの新国立劇場の上演史の中でも注目に値する領域に踏み込んでいる。その理由は、斬新な舞台美術や舞台衣装だけにあるのではない。それはとりもなおさずこのオペラの魅力を見抜く力、見通す力にある。「ロマンチック・オペラ」から「悲劇」への大きな転換は、場合によっては理解されにくい解釈であるかもしれないが、これを実証するかのように迫り来る背景の変化や人間の想いを押しつぶしていく筒状のパイプの飛来に、だれもが底知れぬ不安と圧迫感を感じ取ったに違いない。濃密であった舞台構造こそが雄弁にこの物語の悲劇を語っていたと言えよう。東京発の舞台として、これは大いに誇れる佳作である。（後期について）「ピーター・グライムズ」のように「難解」とされるオペラを日本の観客に分かりやすく紹介したことは今期のハイライトであった。極端なまでに舞台を簡素化し、観客の意識を徹底的に集中させることで、演出家や演奏家たちの意図はしっかりと客席に届けられたであろう。舞台以外でのホワイエでの展示会、リブレットの販売などこれまでにない新機軸が打ち出された。

	今後も新たな挑戦に臨んでもらいたい。 ・ 新演出の「ローエングリン」の舞台は、正直ピンと来なかった。写実的な舞台である必要はないし、様式的なもの現代では当然だと思うが、人の動かし方に冴えがないのは、どの場合でも困る。それから気になったのは、日本人指揮者たち。いい加減な外国人を使うくらいならどんどん日本人にチャンスを与えてほしいと思っているが、7月に聴いた3人は、オペラ的なドラマの喚起力に、かなりの不満を感じざるを得なかった。しっかり振る、アンサンブルを形成することはもちろん基本で、おろそかにはできないことと思うが、そこにサムシングを加えられる新しい才能を、今後も探し続けてほしい。 ・ 「ピーター・グライムズ」の演出家ウィリー・デッカーがこのプロダクションのエンディングを自ら再検討した結果、個人の心が集団に呑みこまれる悲哀をさらに強めた点にも賛辞を呈したい。おそらくは稽古場での周囲の熱意に突き動かされてのことと思われる。評者は、偶然のことながら、事前にインタビューの機を得ていたので、彼のアイデアの変化をより鮮明に感じ取り、敬服の念を一層強くした。そのことも付記しておきたい。 (3)営業、広報面について ・ どの公演でも概ね、集客力が高まっているように感じられたが、今後の展開に関しては、出演歌手、指揮者、演出家たちのコメントないしはインタビュー記事が、報道各媒体でさらに掲載され、「劇場の賑わい」を伝える一環として活用されればと思う。また、後期の「ピーター・グライムズ」特設サイトにおいては、インターネットという媒体を活かしたデザインが特に優れていると感じたので、その旨は率直に申し述べておきたい。そして、高校生のためのオペラ鑑賞教室「ラ・ボエーム」では、場内の案内係の具体的な指示法や上演前のアナウンスの内容など、高い効果を挙げていたと思われた。地道な努力の積み重ねあつての成果として、敬服の念も覚えた次第である。後期では新演出のみならず、「トスカ」や「アイーダ」のように演出プランとしてしごく穏当でクラシカルな舞台の再演も注目されていたと思う。日本のオペラ・シーンにおいては、様々な演出法が並存し、一つの流れにむりやり収斂しないことが、かえって発想の自由度を高めているように感じられる。それゆえ、新国立劇場においては、今後もより多彩な人材が活用されるべく、その点を広報面でも強調できるよう、宣伝文、キャッチコピー等のさらなる練り上げに期待したい。ホームページなどインターネットの場での新しい試みが徐々に成果を挙げているようでもあるので、新種の企画や新たな視点をチラシ等の紙媒体の場においても追求されるよう望みたい。 ・ 未だに歌手のキャンセルが続いていて、営業・広報においては苦労が絶えないと思われるが、様々なメディアを活用して発信した情報は浸透している。チラシは、以前はA4見開き4ページのタイプが主流だったようだが、最近はA4両面タイプが多くなってきたようで、こちらの方が最初の情報提供には有効だと思われる。よく聞かれるのは、急に予定が確保できて当日券を購入したくなったとき、残席の状況をHPで確認できるかどうかだが、そのあたりの利便性が上がると、社会人の観客も広くつかめるのではないか。開場15周年を迎えて新国立劇場の名前は広く認知されたと思うが、公演内容については、まだ伝わっていない部分もあると思う。最近、「アカデミック39」というプランができたようだが、30代対象の割引制度は本当に必要なのだろうか。かなり制限がかけられているので、様子を見ながらかもしれないが、若い世代が継続的にオペラを観るようになるかは疑問で、実際のチケットの販売状況等から分析の必要があるだろう。また最近、劇場がオペラの対訳や書籍を発行していて、広報にも活用されると思う。	
--	---	--

・ 平日マチネー公演はすっかり定着し、ゆったりと時間を過ごされている元氣なリタイア層の方々。ホワイエに適度にちらした椅子とテーブルで、最近ではミニお寿司まである軽食やワインを楽しまれている。休憩時にはもぎり線の入口を階段のところまで広げた工夫も、会場全体をゆとりのあるものにしていて成功だと思う。このように上質な劇場文化を提供し、それが常に一定のクオリティで提供されていることが常連のお客様を獲得し、増やしていく一番の方法であり新国立劇場は着実にお客様の信頼を獲得してきていると感じている。日本は今、様々な分野で厳しい状況があり、新国立劇場の営業も苦勞なされていると思うが、このような時であるからこそ、お客様に、この劇場で過ごす時間がとても大事なもの、という気持ちになっていただけるようなサービスを今後とも続けていっていただきたいと思う。

（後期について）厳しい経済環境の中でチケット販売、スポンサー支援体制は厳しい時代になっていると思う。このレポート対象期間の公演も空席が目立つ時もあった。しかし愛好家の方々は必ずおられるし劇場の主たるターゲット層の熟年層はますます増加するということで、是非前向きに取り組んでいただきたい。パンフレットの内容はとても充実していると思う。知的好奇心を満たすものや、ちょっと軽い、楽しいものや、劇場の裏話的ものなどよく考えられていると思う。

・ クヴィエチェンとフォークト、スターに的を絞った広報は、アリだと思った。オペラには色々な切り口があっていい。最後に、サイトに関して、去年と同じことを書くが、演目のキャストとスタッフ、もっと「すぐ分かる」ようにできないか。お客が知りたいのはまずそれではないかと思う。過去の公演に関しても、舞台写真のページが最初でなくてもいいのでは。

・ もうすこし初心者を目線からみても理解できる案内、詳細な解説が望まれる。せっかくの高水準に到達しながら、このレベルが歌手や演奏家の交代で消えてしまうような公演であるならば、あまりにも残念である。演出家の意図、デザイナーのアイデア、デッサンなどはすでに全て存在している。これをもう一度編集し、丁寧に観客に伝える努力を切に望みたい。公演を記録に残し、広報し、販売していくことも必要であろうが、同時に現場の人々のメッセージを確実に受け手に渡していく努力をお願いしたいと思う。これまでのシーズンの中ではほとんど顧られることがなかったが、今回はもっとも大きく変貌を遂げた箇所がある。それはエレベータの設置を含めエントラス部分が大きく様変わりした点である。入口の平面から館内へと入り、階段を上りながら顔を上げると目線のはるか上にセンスの良い椅子やテーブルがまるで「空中庭園」のように点在するのが見える。そこに先客が腰を下ろしていたり、或いは遊歩道代わりに利用している観客の姿がちらほらと見える。これまで存在しながらも生かされてこなかった空間に、さわやかな風が吹きこまれたかのような、新鮮な感動を覚える一瞬であった。この回廊が現在のように途中で遮断されるのではなく、衣装展示スペースまで延長され、回遊できるコースとなることを願う。一カ所に滞留させるラウンジ方式も良いが、長時間椅子に座っている観客が、せめて休憩の間には公演の余韻に浸りながら散策できる動線の可能性を探ってもらいたいものである。最後に後期から始まったプログラム冊子の「初演にタイムスリップ」は、毎回楽しみにしている箇所である。初演当時の写真や評判記、新聞などの「ナマ」の情報を掲載することで作品の持つ歴史的な意味がさらに増すことを大いに期待したい。

4. アンケート調査

11公演で16回実施した。

有効回答数6,057人（配布24,075人、回収率25.2%）。回答者の90.8%が概ね満足と答えた（5,499

人)。

【特記事項】

- ・平成24年9月、2014/2015シーズンからのオペラ部門の次期芸術監督予定者として、飯守泰次郎氏が芸術参与に就任した。
- ・前年度の東京藝術大学に続き、新国立劇場運営財団と武蔵野音楽大学、国立音楽大学、東京音楽大学、大阪音楽大学、桐朋学園大学、北海道教育大学、昭和音楽大学の7大学との間で連携・協力に関する協定を締結し、教員のオペラ公演出演について協力が得られることとなった。
- ・『音楽の友』2月号「特集 42人の音楽評論家・記者が選ぶコンサート・ベストテン2012」において、オペラ「ピーター・グライムズ」が第1位を獲得した。

《数値目標の達成状況》

【目標入場者数の達成状況】

本公演 実績68,561人／目標65,260人（達成度105.1%）
鑑賞教室 実績10,311人／目標9,000人（達成度114.6%）
合計 実績78,872人／目標74,260人（達成度106.2%）

2-(2)-② バレエ

1. 公演実績

公演名	劇場	期間	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数
「白鳥の湖」	オペラ 劇場	5/5(土・祝)～ 13(日)	実績	6回	6日	8,182人	(76.1%)	10,752人
			計画	6回	6日	7,000人	(65.1%)	10,752人
「マノン」		6/23(土)～7/1(日)	実績	5回	5日	4,948人	(55.2%)	8,960人
			計画	5回	5日	6,300人	(70.3%)	8,960人
「シルヴィア」 (新制作)		10/27(土)～ 11/3(土)	実績	6回	6日	6,480人	(60.3%)	10,752人
			計画	6回	6日	7,000人	(65.1%)	10,752人
「シンデレラ」		12/15(土)～ 24(月)	実績	7回	7日	10,202人	(81.3%)	12,544人
			計画	7回	7日	10,000人	(79.7%)	12,544人
「ジゼル」		2/17(日)～ 24(日)	実績	5回	5日	6,294人	(70.2%)	8,960人
			計画	5回	5日	7,000人	(78.1%)	8,960人
「ダイナミック・ダンス！」(新制作)	中劇場	1/24(木)～ 27(日)	実績	5回	4日	2,766人	(61.1%)	4,530人
			計画	5回	4日	3,500人	(77.3%)	4,530人
【小 計】	6 公演(計画:6 公演)		実績	34回	33日	38,872人	(68.8%)	56,498人
			計画	34回	33日	40,800人	(72.2%)	56,498人

こどものためのバレエ劇場「シンデレラ」	中劇場	7/27(金)～ 29(日)	実績	6 回	3 日	5,085 人	(92.5%)	5,496 人
			計画	6 回	3 日	4,100 人	(74.6%)	5,496 人
【小 計】	1 公演	(計画:1 公演)	実績	6 回	3 日	5,085 人	(92.5%)	5,496 人
			計画	6 回	3 日	4,100 人	(74.6%)	5,496 人
【バレエ 合 計】	7 公演	(計画:7 公演)	実績	40 回	36 日	43,957 人	(70.9%)	61,994 人
			計画	40 回	36 日	44,900 人	(72.4%)	61,994 人

2. 営業・広報

- ・ セット券購入の観客はバレエの最重要顧客であるとの位置づけの下、2012/2013 シーズンセット券の販売を実施した。
- ・ 空席のある場合に限り事前に半額で予約できる 25 歳以下の若年層を対象とした「アカデミック・プラン」を昨年度に引き続き実施するとともに、26 歳以上 39 歳以下の年齢層を対象に、「アカデミック 39」を新たに立ち上げた。
- ・ マスコミ各社への取材依頼、ポスター、チラシ、インターネット、ジ・アトレ会報等により、公演の周知を図り、集客に努めた。
- ・ 開場 15 周年にあたる平成 24 年度、2012/2013 シーズンの開幕公演として、オペラ「ピーター・グライムズ」、バレエ「シルヴィア」、演劇「リチャード三世」と、3 部門とも英国ゆかりの作品を上演。このことから、ブリティッシュ・カウンシルとの共催により、英国をテーマに舞台芸術の普及を図る企画「新国立劇場・英国舞台芸術フェスティバル 2012」を劇場を挙げて開催した。期間中は特設サイトを開設して随時情報を発信、同フェスティバルの関連企画として、英国大使館で記者発表を行うとともに、その模様を動画中継システム(USTREAM)により配信したほか、各演目や英国の文化芸術に関連する各種の講座、トークセッション、展示、上映会、装飾等を実施し、関心を刺激するとともに活気に満ちた空間で来場者を迎えた。
- ・ 演目別の広報については、様々な角度からアピールする方法を検討し、きめ細かいマスコミ対応による記事掲載の促進や、特設サイトにおける動画の活用をはじめとしたコンテンツの充実、他劇場での告知活動、e メールクラブ会員に対して公演関連情報や芸術監督のメッセージを送信するなど、観客向けのより詳細な情報を随時発信することで、多くの人々の期待感を醸成し、鑑賞へと結び付けた。
- ・ バレエ公演については特に、現代作品を基調とする新しい演目の紹介や、ゲストをはじめとする特定のダンサー頼みではない、新国立劇場バレエ団自体の魅力による観客の獲得を目指すビントレー芸術監督の方針について、引き続き観客の理解度・認知度の向上を図った。さらに、新国立劇場バレエ団オフィシャルブログを通じて、稽古の様子、公演準備の様子、チケット情報などを迅速かつ継続的に発信し、公演へのより一層の関心を喚起するとともに、ファン作りに努めた。
- ・ インターネットを活用した特設サイトの開設や動画掲載、他劇場での告知活動などを通じて、公演に対する注目度を向上させるとともに、期待感を高めることに努めた。
- ・ インターネットで関連キーワードを入力すると新国立劇場の広告が自動的に表示される「検索キーワード連動型広告」というアプローチを行い、精密な営業活動を行った。
- ・ 新国立劇場愛好者に対し e メールにて各種情報を提供、必要な情報を的確に周知し、顧客の利便性の向上に資した。(e メールクラブ)。

3. 外部専門家等の意見(現代舞踊と一部共通)

	(1)公演全体について ・（前期の）4 演目のうち「Dance to the Future 2012」「マノン」を拝見した。シーズン終盤に力が入った公演が続き、コンテンポラリー作品、マクミラン作品のスタイルが身体に入っていて、大変よかったと思う。前者はバレエ・ダンサーが現代作品に出演する意味がよく分かる（バレエ・ダンサーでなくては踊りこなせない）高度な身体能力を活かした仕上がりであった。後者では、前回初演時と比べて全体的に表現力が大きく向上していると感じた。ゲストの人選（日本では特に有名とは言えない存在ながら、実力・本作品での経験が優れている）もよく、また団員キャストのうち拝見した小野絢子／福岡雄大も、役作りのポイントをよく押さえて、初演ながら見事な出来だったと感じた。主役ダンサーとして自覚が芽生え、表現の幅も広がってきていると感じた。（後期は）現代作品、創作作品が充実し、また主役を中心に、伸びるべきダンサーの皆さんが着実に（以上に？）成長なさったと感じた。バレエ公演は、団員のみなさんのレベルの高さが活かせる演目が並んでいたとの印象。特に 2012 年 10 月の『シルヴィア』は、音楽に対してステップの密度の濃いピントレー振付を初主演の小野絢子さん、米沢唯さんともにみごとにこなしており、見応えがあった。12 月の「シンデレラ」は回を重ねてアシュトン振り付けの風味、或いはスタイルといったものが全体によく表現できていて、すっかりバレエ団のレパートリーとして定着した印象を受けた。道化の演技等にも（特に福田圭吾さん）即興に見えるくらい自由なところがあり、全体に余裕のある舞台を心から楽しめた。逆に 2013 年 2 月の「ジゼル」は前回から間が空いてしまったこともあり、ややメリハリの弱く、こなれていない出来だったかもしれない。1月のトリプル・ビルは、踊りそのものの質を問われる点、異なる振付家のスタイルにいちどきに挑むという点では物語作品以上に難度が高いかとも思うが、技術の達成度に対してアピールが弱いというか、もっと公演タイトルどおりにダイナミックな気概を見せてくれたらとも思った。とはいえ、それぞれの作品に全体を引き締めるパワフルな存在がいて（「コンチェルト・パロッコ」の長田佳世さん、「テイク・ファイブ」の八幡顕光さん等）、ヤマ場をきちんと盛り上げていたのがよかった。 ・ 前期に私が見せていただいたのは、「Dance to the Future 2012」「白鳥の湖」「マノン」の 3 公演。それぞれ異なる方向性を持った演目だが、いずれも、踊り、美術や照明など、すべてにおいてレベルの高い公演で、国立の劇場が、このように変化とバラエティに富んだプログラムを、固定メンバーでコンスタントに提供できることは、「そうでなくてはならない」と同時に、さすがだと思う。演目によって異なる客層も、幅広く確実にお客様を掴んでいる証しかと思う。後期に私が見せていただいたのは、『ファースト・ステップ』『ダイナミックダンス』、DANCE PLATFORM 2012 AB 両プログラム（『美女と野獣』『明るい部屋』）、それに、貞松浜田バレエ団による AB 両プログラム（『くるみ割り人形』と 3 つの現代ダンス）。『くるみ割り』以外はすべて現代作品、その『くるみ割り』にも貞松浜田バレエ団独自のアイディアがあり、こうしたユニークなプログラムが並んだのは、非常に意欲的な姿勢の表れだと思った。不景気が続き、経済的、政治的、国際的、社会的に不安な要素がはびこる状況では、人はどうしても保守的になる。それは世界的に見られる傾向だ。失敗や状況の悪化を恐れ、なるべく安全な方途を選んで保身をめざすのは、生き残るための本能的欲求とも言える。そんな中、お客様をたやすく集められるわけではない、しかも、多くの手間や経費、技術を要する斬新なプログラムを組み、それらが全て、非常に高い水準で実現されたことに、人間の創造力への讃歌のようなものを感じた。失敗を恐れず、新しい分野や技術の開発に取り組む勇気と創造力こそが、人間の進化の原動力だからだ。国立劇場とはいえ、収支のバランスも考慮されなくてはならないのだろうが、しかしこのような果敢な（しかもすばらしい内容の）プログラムを、国のサポートなくして、他のどんな機関がここまでの高レベルで実現し続けられるだろうか？そうした意味で、これまで以上に強く国立劇場としての方向性や、その意義を意識させられ、心強く、また深	
--	---	--

く感激した公演ラインナップであった。

・ 前期は「平山素子・Dance to the Future2012」「白鳥の湖」「マノン」の三作を観たが、いずれも秀作であった。平山素子という逸材の振り付けで、新国立劇場バレエ団が挑んだコンテンポラリーダンスは、その高度なテクニックにより、上質な表現が叶ったのではないかと。国際的な評価を受けるには、ダイナミズムやエロティシズムなど、プロとしての課題はまだあるかと思うが、有償に値する公演だったと思う。「白鳥の湖」は中国から主役ダンサーを迎え、日中文化交流の一翼を担う公演になったと思う。国やメソッドによって、美的表現や音楽解釈の違いなど多少あるかと思うが、欧米以外の優れたダンサーから、私たち東洋人が学ぶものも多くあると思う。牧阿佐美氏の演出は、子供も大人も楽しめる美しいバレエ世界であった。「マノン」は英国 20 世紀バレエを知る上で、大変有意義な舞台であった。米国から主役ダンサーを迎え、男女の心の機微、退廃、悲劇など、文学性の高い作品を、言葉のない身体表現で見事に見せてくれた。今後、再演されるごとに磨かれていく作品なのだろう。舞台芸術は、表現者も観客も、何れもが「熟達」したとき、初めて『娯楽』になると思う。その努力を、双方が、楽しみながら続けたいものだ。私が後期に拝見したバレエ公演は「シルヴィア」「シンデレラ」「ダイナミックダンス」「ジゼル」。ダンス公演は「森山開次・曼荼羅の宇宙」「DANCE PLATFORM 2012A ユニット・キミホ」、同じく「B 高谷史郎『明るい部屋』」、「新国立ダンサーの振付けによる作品集・First Steps」。そして、地域招聘公演の「貞松浜田バレエ団による「くるみ割り人形くお伽の国」」であった。新国立劇場開場 15 周年を迎えるシーズンは、エリザベス女王在位 60 周年、ロンドンオリンピック・パラリンピック開催の年となり、「新国立劇場・英国舞台芸術フェスティバル」と銘打って、英国関連の作品を選んだのスタートとなり、バレエ、オペラ、演劇ともに、大変盛りだくさんな、色彩感あふれる公演の数々を楽しむことができた。ビントレー監督は「シルヴィア」はフランスの作曲家・ドリーブの作品なので、英国とはあまり関係ないのだがと、記者発表では謙遜していたが、英国を代表する振付家・ビントレー氏のセンスの良さとエスプリの利いたすばらしい作品であったと思う。彼のステップと音楽の絶妙なコンビネーションは周知のことだが、テレビ放送の映像を見ると、その斬新さと品の良さ、ユーモアのセンスなど、改めて実感し、ダンサーの高度なテクニックにも感心した。また、「ダイナミックダンス」は、クラシックファンからコンテンポラリーのファンに至るまで、幅広い客層の心を掴んだ公演だったと思う。震災の影響で公演が遅れたが、満を持しての『トリプルビル』公演に客席も満足したことと思う。「ジゼル」は東京交響楽団の名演奏が光り、オーソドックスな舞台に華やかさとドラマ性を添えていた。初日を飾った、長田佳世／菅野英男のペアもよく踊った。新国立バレエ団は、ここ数年、小野絢子／福岡雄大という素晴らしいペアを育ててきたが、それに続く幾組かのペアも生まれ育ちつつあるようだ。開場 15 年にして、日本を代表するバレエ団に育ってきたことは、奇跡のような長足の進歩と言わざるを得ない。地域招聘公演「貞松浜田バレエ団・くるみ割り人形」も最高に楽しいバレエ公演だった。

・ 前期の舞踊公演は、「こどものためのバレエ劇場」を除くと、バレエが 2 本とコンテンポラリーダンス 1 本であった。このうちバレエはいずれも再演（「マノン」については大幅な改定があったものの）であり、コンテンポラリーダンスの方は 2 日間 2 公演のみであった。スケジュールや予算の兼ね合いもあるであろうし、再演が悪いということでもない（むしろ大いに必要）が、劇場のプレゼンスという意味からすれば、半年に 1 本くらいは野心的な新作を組み込んでほしい気がする。必ずしも規模は小さくなくても、新しい才能を思い切って起用するなど、話題性のあるプログラムがあるとよいのではないかと。「こどものためのバレエ劇場」のような企画は非常に重要である。最近では、地方の公共ホールや民間劇場においても類似の取組がなされているが、トップダンサーを起用しての、この“贅沢な”プロダクションは、新国立劇場ならではのと言える。子供対象や入門者向けこそ最高のものを、とは言い古されたことであるが、ぜひ

	今後も継続して行ってほしい。 ・（後期は）古典バレエからコンテンポラリーダンスまで、バレエ研修所発表公演から新国立劇場バレエダンサーによる振付公演まで、実に幅広いジャンル、趣旨、出演者による公演が並んだ。従来は西洋から移入したままの古典バレエがプログラムの多くを占めたが、芸術監督による創作バレエ、日本人振付家によるコンテンポラリーダンスがバランスよく配置されることで、舞踊の楽しさ、芸術性と共に可能性を広げた。このように年間を通してバランスをとり、それが長期的にはバレエ団、観客の育成につながるようなプログラムを考え、実行することは、個々の私立のバレエ団には難しい。古典を尊重しつつ、グローバルな現代社会へと視野を広げること、また、日本の作家によるオリジナル作品を創作することを通して、日本のバレエ界、ダンス界を成長させるためのリーダーシップをとることが“国立”としての存在意義でもあろう。また、ダンサーの成長が著しい。若く才能あるソリストが抜擢され、大きな舞台を踏むことで大きく飛躍し、さらに、若手の台頭に刺激を受けたベテラン、中堅勢が持ち味を発揮するという、好ましい循環が生まれており、ダブルキャスト、トリプルキャスト全てを見たいと思わせるような公演になりつつある。東京一極集中を排す地域招聘公演（貞松浜田バレエ団）の企画、上演も非常に高く評価できる。 (2)創作面について ・（前期について）バレエダンサーの技術や、スタッフの技術の高さは、ナショナルシアターとして十分胸を張れる水準に達している。とくにダンサーについては、若手も着実に力をつけており、新国立劇場の養成システムは良く機能しているようだ。 ・（前期は）現代舞踊、古典バレエ、現代バレエ、子供向けの作品と選択のバランスがよく、シーズン終盤に盛り上がるラインナップだったと思う。 （後期は）新しいレパートリー（必ずしも新作ではありませんが）が次々と加わり、ダンサーにとっては毎日がルーティンにならず、絶えず挑戦の場になっていると思われるのがよい点。 ・（後期について）芸術監督ビントレーによる「シルヴィア」等はエンターテインメント性で観客の拡大を目指しており、ダンサーたちもその目的に応えることで、プロフェッショナルとしてどのような作品でも踊り、観客を楽しませることができるという意識と技術を身に付けられるようになってきた。このプロ意識こそ、日本のバレエ界に必要なものであり、それがバレエ団と観客を育てることにつながる。日本人振付家が数多く創作したことは、今期の大きな収穫である。才能のある若手、中堅作家に創作のチャンスを与え、彼らもそれに応えようとしていた。すべての作品が満点ではなくても、長期的に見れば、日本人振付家を育て、それぞれのスタイルに対応して踊ることのできるダンサーを育てることは、新国立劇場バレエに強く求められることであろう。その意味で、創作面の充実を高く評価できる。 ・（前期について）『白鳥の湖』のようなメジャー作品が定期的にとりあげられるのは当然だが、現代作品（平山素子さんの『兵士の物語』）が、2年と間を空けずに同じ劇場で再演されるのは、珍しいことなのではないか？新しい作品は、ある程度安定した古典作品に比べて、変動も大きいことと思う。そうした演出や振り付けの変遷を目の当たりにできたのは、興味深いことであった。「知る人ぞ知る」「隠れた名作」（＝あまり上演されない）は、あまり観客動員にはつながらないのかもしれないが、国立の劇場だからこそ、バランスよく多方面に目を向けた、思い切った試みを期待したいと思う。（後期について）独自性あふれる公演であっても、創り手のアイデアが明確で、それを確実に実現できる驚異的技術や表現力を持ったダンサーたちの踊りが、説得力にあふれたすばらしいものなので、その評判によって、多少なりとも公演の終盤には、集客が上向いたのではないかと（そうだといいが）。個人的には、『ダイナミックダンス』の3作品（特にバランシンとサープの、深い音楽的理解をしめす独創的な振り付けと、難度の高	
--	--	--

い、しかし美しい踊り)や、貞松浜田 B プログラムのキリアン、ナハリンの機知と創造力には、度肝を抜かれ、人間の持つ様々な能力の可能性とそのエネルギーに魂を突き動かされる思いであった。こうした作品のすばらしさは、何度も上演するうちに、必ずや人口に膾炙してゆくはずだ。「現代の古典」たるこれらの作品の継承も、国立機関の重要な任務だと思う。

・ (前期について)開場 15 年という刻の経過は、新国立劇場の様々な分野を育て変容させてきたと思う。コンテンポラリーダンスも、当初の関係者らしき人々のみが集まるマニアックな公演から、ダンスに興味のある一般観客層にまでようやく広がりを見せてきたと思う。バレエ公演も、演出やテクニクについて囁き合う高度なファンはもとより、「綺麗ね～」と溜め息をついて心から楽しむ一般のバレエファン層に大きく広がってきたと思う。こうした広がりには、本当に大切なことで嬉しいことだ。が、半面、もっとも敏感な観客層でもある。おもしろくなければ、来なくなるからだ。レストランの味が落ちると客足が遠のくのと同じだ。新国立劇場のコンテンポラリーダンスも、今後、どういう方向に進んで行くのか、大切な時期に来ているようにも感じる。より個性化し先鋭化するのも1つの選択肢だ。エンターテインメント性を高めるのもひとつの選択肢かもしれないが、その線引きは難しいところだ。いずれにせよ、日本を代表する国立バレエ団として、国際的に通用する確固たる演目がなければならない。古典バレエと、新作を含む現代バレエの両立も、少し目鼻が付いてきたのか。ビントレー監督は「現代バレエにも力を注ぎたい」と、かつておっしゃっていた。その成果が、現れてきているように感じる。振り付けはもとより、音楽、舞台美術、照明、衣装など、ビントレー監督にインスパイアされて、新国立バレエが学び手にしてきたものは、限りなく豊かで大きいと思う。

(3)営業、広報面について

・ ホームページが大変充実しており、公演前、公演後と、長い期間、多角的に演目について知識を深めることができるコンテンツに感嘆している。バレエ団ブログのような、親しみやすい公演の裏側(お稽古の様子、団員の皆様の日常など)から、演目についてより深く、幅広く理解できる、知的なコラムまで、様々な観客の興味に応える幅広い内容が魅力的である。「永遠のファム・ファタル」と題して、バレエの「マノン」と、同時期に上演している、演劇部門の「サロメ」を取り上げたコラムなど、他部門の演目ともリンクさせたこのような取組は(少し前にはオペラ部門との「こうもり」の「競演」もあった)、観客にいろいろな事象のつながりを示唆し、新たな興味を喚起させるという点で、非常に有意義だと思う。内容が会場で販売されているプログラムとかぶっていないのもエライ！(かぶっていたらプログラムを購入する必要、なくなる)。こうした形で、時代や文化を幅広くとらえて演目を紹介する試み、ぜひ今後も続けていただきたい。なじみの少ない現代作品や振付家についての記事やビデオをホワイエで紹介しているのは、好奇心もそそるし、長い休憩時間のヒマつぶしにもなり、よいアイデアだと思う。大雪の折、開演を10分遅らせたり、終演後に、全ての交通機関の運行状況を貼り出したりしてくれた劇場の方々の御配慮は迅速で、状況の分からない公演後のお客様に安心感を与えるものでもあり、日本らしい細やかなサービスだった。

・ 各演目についての情報は、ホームページやジ・アトレ等においてきめ細かく提供されていると感じる。とくに動画などを多用したプロモーションは充実度を増している。一方で、関心を持って情報にアプローチしてくる人たち以外の、潜在的な顧客に対する仕掛けはまだまだ工夫の余地を残しているように思う。バレエ／ダンスへの関心を一般の人々に広げていくためのアイデアが望まれる。また、劇場の運営や財務的な部分についての広報が、公益財団としての義務的な開示レベルに依然としてとどまっているのも残念だ。関心を持ってチェックする人は多くないかもしれないが、今後、民間資金の比率を上げていくべきことを考えると、そういう部分もわかりやすく説明していく努力が必要だろう。

	・（前期について）「マノン」は実は最終日にもう一度拝見したが、かなり日が迫ってから購入したにもかかわらず、4階最前列中央ブロックというすばらしい席が取れたのが、うれしい半面少々残念でもあった。学生、リピーター、家族連れ等、チケットの値段の面で手を出しやすい（開拓しがいのある？）ところであり、何より、上の方の席に活気があると、公演の盛り上がり＝お客様の最終的な満足度も断然違ってくるのではないかと。また、上の方の席は久しぶりだったが、階段の壁に演目にちなんだ写真や、衣裳デザイン画等の展示があると、より雰囲気はよくなるのではとも感じた。（後期について）以前、会場販売のプログラムに、上演作品そのものについての文章（該当のバレエや原作についての解説、音楽について、上演史等）が少ないのではと私見を述べたが、今シーズンはその意味では充実した内容のものが多く、とくにダイナミック・ダンスは作品理解が大変深まるすぐれた内容であった。ホームページも動画が増えるなど、よりバレエ・ファンの興味を引き付けるものになってきていると感じている。 ・（前期について）「白鳥の湖」を二度目に拝見したとき、学生の鑑賞教室と一緒にあった。多少の喧噪はあったが、次世代の文化性を高めるためのこうした教育は、とても大切なことと思った。震災後、一時遠のいた客足を取り戻すには、以前からの観客の復帰も望ましいが、新たな観客層の開拓と獲得が、必順の課題かもしれない。大阪の文化政策を巡る論議と混乱は、他人事ではなく、データの蓄積や解読と活用、斬新な企画力や、粘り強い営業活動など、日本の文化の「聖火ランナー」としての活躍を期待している。「国立劇場」という「縛り」は、ときとしておもしろみを欠くこともある。私は、古典芸能も好きで、半蔵門の国立劇場にもよく伺うが、たとえロビーにおいても「食べたり飲んだりしながら芝居や文楽を楽しむ」という情緒はなかなか味わいにくい、ちょっとスクエアな劇場である。最近では、少しずつ改善されている様子だが、小劇場など、休憩時間の弁当タイムの席取り合戦やペットボトルの味気なさ、外国人にも驚きで、少し残念に感じている。新国立劇場も、小劇場のバーが営業されたり、オペラパレスのホワイエの華やぎを演出したり、また劇場の方々が観客とお話されたり、クロークの案内に至るまで、様々な努力をされていると感じているが、ロンドンのコヴェントガーデンなどの趣には適わない。劇場は、「すばらしい演目」と「安全」が第一義だが、入口を入った瞬間から、終演後出口を出るまでの全てが、観客にとってのエンターテインメント・夢の世界なのだと思う。新国立劇場ならではの、お洒落で心温まるサービスを、これからも期待したい。（後期について）15年前、開場当時のことを思い出すと、オペラパレス・ロビーの観客の年齢層は、多少とも若返ったのではないかと。また、バレエの主演と云えば「ザハロフ」と言われるくらい、海外からのゲストスターダンサーを目当てに、チケットを買い求めたものだが、最近では、バレエに関しては、新国立バレエ団の主演で、十分に満足していただけるようになってきたと思う。また、クラシックもダンスも、ともに高いレベルの技術で表現できるバレエ団は貴重だ。まさに15年の積み重ねと、歴代芸術監督やスタッフの皆さんの努力が実りつつあるのだろう。在京の多くのバレエ団が様々な問題を抱える今、新国立劇場バレエ団が、ますます輝いていく時節到来ではないか。営業と広報は、大変重要。セレブリティのための「新国立バレエ団」を目指すのか、大衆にも愛される「新国立バレエ団」にするのか。新芸術監督を間もなく迎えるに当たって、有効な戦略を立てるときが迫っていると思う。 ・ 定番の古典バレエとは異なり、コンテンポラリーダンス、コンテンポラリーバレエ、地域招聘公演は集客が難しいと思われるが、善戦していた。長期的に見れば、これらの作品を理解できる観客を育てることが、観客全体のレベルアップにつながり、さらに観客から見られるバレエ団をレベルアップさせることになる。コンテンポラリーダンスでも比較的集客しやすい人気作家やダンサーをバランスよく使いながら、試みを継続してほしい。ネットを使った公演前からの具体的な情報発信（インタビュー、リハーサル風景など）が評価できる。
--	--

4. アンケート調査

7公演で7回実施した。

有効回答数 1,940 人(配布数 12,365 人、回収率 15.7%)。回答者の 93.3%が概ね満足と答えた(1,810 人)。

【特記事項】

- ・平成 24 年 9 月、2014/2015 シーズンからの舞踊部門の次期芸術監督予定者として、大原永子氏が芸術参与に就任した。
- ・新国立劇場バレエ団プリンシパルの福岡雄大が第 44 回舞踊批評家協会新人賞を受賞した(「マノン」「シルヴィア」「シンデレラ」ほかの成果に対して)。
- ・新国立劇場バレエ団プリンシパルの山本隆之が平成 24 年度(第 63 回)芸術選奨文部科学大臣賞を受賞した(「アンナ・カレーニナ」(23 年度公演)ほかの成果に対して)。

《数値目標の達成状況》

【目標入場者数の達成状況】

本公演 実績 38,872 人／目標 40,800 人(達成度 95.3%)
こどもバレエ 実績 5,085 人／目標 4,100 人(達成度 124.0%)
合計 実績 43,957 人／目標 44,900 人(達成度 97.9%)

2-(2)-③ 現代舞踊

1. 公演実績

公演名	劇場	期間	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数
「DANCE to the Future 2012」	中劇場	4/21(土)～ 22(日)	実績	2回	2日	1,309人	(88.3%)	1,482人
			計画	2回	2日	1,180人	(74.9%)	1,576人
「森山開次 曼荼羅の宇宙」	小劇場	10/17(水)～ 21(日)	実績	6回	5日	1,772人	(87.4%)	2,028人
			計画	5回	5日	1,220人	(74.8%)	1,630人
「DANCE PLATFORM 2012」	小劇場	11/29(木)～ 12/9(日)	実績	7回	6日	1,726人	(86.2%)	2,002人
			計画	7回	7日	1,540人	(75.1%)	2,050人
「DANCE to the Future 2013」	中劇場	3/26(火)～ 27(水)	実績	2回	2日	1,217人	(67.2%)	1,812人
			計画	2回	2日	1,370人	(74.8%)	1,832人
【現代舞踊 合計】	4 公演(計画:4 公演)		実績	17回	15日	6,024人	(82.3%)	7,324人
			計画	16回	16日	5,310人	(74.9%)	7,088人

2. 営業・広報

- ・セット券購入の観客は現代舞踊の最重要顧客であるとの位置づけの下、2012/2013シーズンセット券の販売を実施した。

- ・ 空席のある場合に限り事前に半額で予約できる25歳以下の若年層を対象とした「アカデミック・プラン」を昨年度に引き続き実施するとともに、26歳以上39歳以下の年齢層を対象に、「アカデミック39」を新たに立ち上げた。
- ・ 演目別の広報については、様々な角度からアピールする方法を検討し、きめ細かいマスコミ対応による記事掲載の促進や、特設サイトにおける動画の活用をはじめとしたコンテンツの充実、他劇場での告知活動、eメールクラブ会員に対して公演関連情報や芸術監督のメッセージを送信するなど、観客向けのより詳細な情報を随時発信することで、多くの人々の期待感を醸成し、鑑賞へと結び付けた。
- ・ マスコミ各社への取材依頼、ポスター、チラシ、インターネット、ジ・アトレ会報等により、公演の周知を図り、集客に努めた。
- ・ インターネットを活用した特設サイトの開設や動画掲載、他劇場での告知活動などを通じて、公演に対する注目度を向上させるとともに、期待感を高めることに努めた。
- ・ インターネットに関連キーワードを入力すると新国立劇場の広告が自動的に表示される「検索キーワード連動型広告」というアプローチを行い、精密な営業活動を行った。
- ・ 新国立劇場愛好者に対しeメールにて各種情報を提供、必要な情報を的確に周知し、顧客の利便性の向上に資した。（eメールクラブ）。

3. 外部専門家等の意見（バレエと一部共通）

(1)公演全体について

- ・ （前期の）4演目のうち「Dance to the Future 2012」「マノン」を拝見した。シーズン終盤に力が入った公演が続き、コンテンポラリー作品、マクミラン作品のスタイルが身体に入っていて、大変よかったと思う。前者はバレエ・ダンサーが現代作品に出演する意味がよくわかる（バレエ・ダンサーでなくては踊りこなせない）高度な身体能力を活かした仕上がりであった。後者では、前回初演時と比べて全体的に表現力が大きく向上していると感じた。ゲストの人選（日本では特に有名とはいえない存在ながら、実力・本作品での経験が優れている）もよく、また団員キャストのうち拝見した小野絢子／福岡雄大も、役作りのポイントをよく押さえて、初演ながら見事な出来だったと感じた。主役ダンサーとして自覚が芽生え、表現の幅も広がってきていると感じた。（後期は）現代作品、創作作品が充実し、また主役を中心に、伸びるべきダンサーの皆さんが着実に（以上に？）成長なさったと感じた。バレエ公演は、団員のみなさんのレベルの高さが活かせる演目が並んでいたとの印象。コンテンポラリーは10月『曼荼羅の宇宙』、11～12月『Dance Platform2012』A、Bプロを拝見したが、中ではキミホ・ハルバートさんの『Beauties and Beasts』が、主題の掴み方、全体の構成、振り付けと選曲、そして緊張とリラックスの絶妙のバランスに手腕を感じた。
- ・ 前期に私が見せていただいたのは、「Dance to the Future 2012」「白鳥の湖」「マノン」の3公演。それぞれ異なる方向性を持った演目だが、いずれも、踊り、美術や照明など、全てにおいてレベルの高い公演で、国立の劇場が、このように変化とバラエティに富んだプログラムを、固定メンバーでコンスタントに提供できることは、「そうでなくてはならない」と同時に、さすがだと思う。演目によって異なる客層も、幅広く確実にお客様を掴んでいる証しかと思う。後期に私が見せていただいたのは、『ファースト・ステップス』『ダイナミックダンス』、DANCE PLATFORM 2012 AB両プログラム（『美女と野獣』『明るい部屋』）、それに、貞松浜田バレエ団

によるAB両プログラム（『くるみ割り人形』と3つの現代ダンス）で。『くるみ割り』以外はすべて現代作品、その『くるみ割り』にも貞松浜田バレエ団独自のアイディアがあり、こうしたユニークなプログラムが並んだのは、非常に意欲的な姿勢の表れだと思った。不景気が続き、経済的、政治的、国際的、社会的に不安な要素がはびこる状況では、人はどうしても保守的になる。それは世界的に見られる傾向だ。失敗や状況の悪化を恐れ、なるべく安全な方途を選んで保身を目指すのは、生き残るための本能的欲求とも言える。そんな中、お客様をたやすく集められるわけではない、しかも、多くの手間や経費、技術を要する斬新なプログラムを組み、それらが全て、非常に高い水準で実現されたことに、人間の創造力への讃歌のようなものを感じた。失敗を恐れず、新しい分野や技術の開発に取り組む勇気と創造力こそが、人間の進化の原動力だからだ。国立劇場とはいえ、収支のバランスも考慮されなくてはならないのだろうが、しかしこのような果敢な（しかもすばらしい内容の）プログラムを、国のサポートなくして、他のどんな機関がここまでの高レベルで実現し続けられるだろうか？そうした意味で、これまで以上に強く国立劇場としての方向性や、その意義を意識させられ、心強く、また深く感激した公演ラインナップであった。

・ 前期は「平山素子・Dance to the Future2012」「白鳥の湖」「マノン」の三作を観たが、何れも秀作だった。平山素子という逸材の振り付けで、新国立劇場バレエ団が挑んだコンテンポラリーダンスは、その高度なテクニックにより、上質な表現が叶ったのではないかな。国際的な評価を受けるには、ダイナミズムやエロティシズムなど、プロとしての課題はまだあると思うが、有償に値する公演だったと思う。私が後期に拝見したバレエ公演は「シルヴィア」「シンデレラ」「ダイナミックダンス」「ジゼル」。ダンス公演は「森山開次・曼荼羅の宇宙」「DANCE PLATFORM 2012A ユニット・キミホ」、同じく「B 高谷史郎『明るい部屋』」、「新国立ダンサーの振り付けによる作品集・First Steps」。そして、地域招聘公演の「貞松浜田バレエ団による「くるみ割り人形くお伽の国」」であった。新国立劇場開場15周年を迎えるシーズンは、エリザベス女王在位60周年、ロンドンオリンピック・パラリンピック開催の年となり、「新国立劇場・英国舞台芸術フェスティバル」と銘打って、英国関連の作品を選んでのスタートとなり、バレエ、オペラ、演劇ともに、大変盛りだくさんな、色彩感あふれる公演の数々を楽しむことができた。ビントレー監督は「シルヴィア」はフランスの作曲家・ドリーブの作品なので、英国とはあまり関係ないのだがと、記者発表では謙遜していたが、英国を代表する振付家・ビントレー氏のセンスの良さとエスプリの利いたすばらしい作品であったと思う。彼のステップと音楽の絶妙なコンビネーションは周知のことだが、テレビ放送の映像を見ると、その斬新さと品の良さ、ユーモアのセンスなど、改めて実感し、ダンサーの高度なテクニックにも感心した。また、「ダイナミックダンス」は、クラシックファンからコンテンポラリーのファンに至るまで、幅広い客層の心を掴んだ公演だったと思う。震災の影響で公演が遅れたが、満を持しての『トリプルビル』公演に客席も満足したことと思う。「ジゼル」は東京交響楽団の名演奏が光り、オーソドックスな舞台に華やかさとドラマ性を添えていた。初日を飾った、長田佳世／菅野英男のペアもよく踊った。新国立バレエ団は、ここ数年、小野絢子／福岡雄大という素晴らしいペアを育ててきたが、それに続く幾組かのペアも生まれ育ちつつあるようだ。開場15年にして、日本を代表するバレエ団に育ってきたことは、奇跡のような長足の進歩と言わざるを得ない。地域招聘公演「貞松浜田バレエ団・くるみ割り人形」も最高に楽しいバレエ公演だった。

・ 前期の舞踊公演は、「こどものためのバレエ劇場」を除くと、バレエが2本とコンテンポラリー

ーダンス1本であった。このうちバレエはいずれも再演（「マノン」については大幅な改定があったものの）であり、コンテンポラリーダンスの方は2日間2公演のみであった。スケジュールや予算の兼ね合いもあるであろうし、再演が悪いということでもない（むしろ大いに必要）が、劇場のプレゼンスという意味からすれば、半年に1本くらいは野心的な新作を組み込んでほしい気がする。必ずしも規模は大きくなくても、新しい才能を思い切って起用するなど、話題性のあるプログラムがあるとよいのではないか。

・（後期は）古典バレエからコンテンポラリーダンスまで、バレエ研究所発表公演から新国立劇場バレエダンサーによる振付公演まで、実に幅広いジャンル、趣旨、出演者による公演が並んだ。従来は西洋から移入したままの古典バレエがプログラムの多くを占めたが、芸術監督による創作バレエ、日本人振付家によるコンテンポラリーダンスがバランスよく配置されることで、舞踊の楽しさ、芸術性と共に可能性を広げた。このように年間を通してバランスをとり、それが長期的にはバレエ団、観客の育成につながるようなプログラムを考え、実行することは、個々の私立のバレエ団には難しい。古典を尊重しつつ、グローバルな現代社会へと視野を広げること、また、日本の作家によるオリジナル作品を創作することを通して、日本のバレエ界、ダンス界を成長させるためのリーダーシップをとることが“国立”としての存在意義でもあろう。また、ダンサーの成長が著しい。若く才能あるソリストが抜擢され、大きな舞台を踏むことで大きく飛躍し、さらに、若手の台頭に刺激を受けたベテラン、中堅勢が持ち味を発揮するという、好ましい循環が生まれており、ダブルキャスト、トリプルキャスト全てを見たいと思わせるような公演になりつつある。東京一極集中を排す地域招聘公演（貞松浜田バレエ団）の企画、上演も非常に高く評価できる。

(2)創作面について

・（前期について）バレエダンサーの技術や、スタッフの技術の高さは、ナショナルシアターとして十分胸を張れる水準に達している。とくにダンサーについては、若手も着実に力をつけており、新国立劇場の養成システムは良く機能しているようだ。コンテンポラリーダンスについては、海外マーケットをもう少し意識していけないだろうか。たとえば平山素子は、コンテンポラリーでは新国立劇場の看板的存在になりつつあるのだから、劇場として海外の主要劇場やフェスティバルにプロモーションしていったほしい。

・（前期は）現代舞踊、古典バレエ、現代バレエ、子供向けの作品と選択のバランスがよく、シーズン終盤に盛り上がるラインナップだったと思う。（後期は）新しいレパートリー（必ずしも新作ではありませんが）が次々と加わり、ダンサーにとっては毎日がルーティンにならず、絶えず挑戦の場になっていると思われるのがよい点。また、『曼荼羅の宇宙』で森山開次さんが芸術選奨新人賞を受賞されたのも、本人の力量はもちろんのことですが、劇場側の企画力、サポートも大きく資したのではと感じている。

・（後期について）芸術監督ビントレーによる「シルヴィア」等はエンターテインメント性で観客の拡大を目指しており、ダンサーたちもその目的に応えることで、プロフェッショナルとしてどのような作品でも踊り、観客を楽しませることができると意識と技術を身に付けられるようになってきた。このプロ意識こそ、日本のバレエ界に必要なものであり、それがバレエ団と観客を育てることにつながる。日本人振付家が数多く創作したことは、今期の大きな収穫である。才能のある若手、中堅作家に創作のチャンスを与え、彼らもそれに応えようとしていた。全ての作品が満点ではなくても、長期的に見れば、日本人振付家を育て、それぞれのスタイルに対応し

	て踊ることのできるダンサーを育てることは、新国立劇場バレエに強く求められることであろう。その意味で、創作面の充実を高く評価できる。 ・（前期について）『白鳥の湖』のようなメジャー作品が定期的に取り上げられるのは当然だが、現代作品（平山素子さんの『兵士の物語』）が、2年と間を空けずに同じ劇場で再演されるのは、珍しいことなのではないか？新しい作品は、ある程度安定した古典作品に比べて、変動も大きいことと思う。そうした演出や振り付けの変遷を目の当たりにできたのは、興味深いことであった。「知る人ぞ知る」「隠れた名作」（＝あまり上演されない）は、あまり観客動員にはつながらないのかもしれないが、国立の劇場だからこそ、バランスよく多方面に目を向けた、思い切った試みを期待したいと思う。（後期について）独自性あふれる公演であっても、創り手のアイディアが明確で、それを確実に実現できる驚異的技術や表現力を持ったダンサーたちの踊りが、説得力にあふれたすばらしいものなので、その評判によって、多少なりとも公演の終盤には、集客が上向いたのではないかと（そうだといいが）。個人的には、『ダイナミックダンス』の3作品（特にバランシンとサープの、深い音楽的理解をしめす独創的な振り付けと、難度の高い、しかし美しい踊り）や、貞松浜田Bプログラムのキリアン、ナハリンの機知と創造力には、度肝を抜かれ、人間の持つ様々な能力の可能性とそのエネルギーに魂を突き動かされる思いであった。こうした作品のすばらしさは、何度も上演するうちに、必ずや人口に膾炙してゆくはずだ。「現代の古典」たるこれらの作品の継承も、国立機関の重要な任務だと思う。こうした巨匠たちの手練手管があますことなく活かされた作品に比べると、新しい試み『ファーストステップス』や『DANCE PLATFORM』には、芸術的熟成度や洗練度の点で物足りなさもあった。『ファーストステップス』は事前セレクションがないだけに、「“未完成”のものをみる」という希有な機会であり、「どんな振り付け／演出がおもしろいのか、そうでないのか」という、普段の“完成された”公演では無意識に享受している（あって当然なので気付かない）「振付・照明・演出の複合的魔術」について、観客にも考えさせる興味深い試みであった。新シーズンも第2弾が予定されているようで、振付家の卵たちの成長が楽しみだ。彼らに、観客からのフィードバックが伝えられ、それが次年度以降の作品に反映されれば、お客の側にも「つくり育てる喜び」が生まれるかもしれない。 ・（前期について）開場15年という刻の経過は、新国立劇場のさまざまな分野を育て変容させてきたと思う。コンテンポラリーダンスも、当初の関係者らしき人々のみが集まるマニアックな公演から、ダンスに興味のある一般観客層にまでようやく広がりをみせてきたと思う。バレエ公演も、演出やテクニクについて囁き合う高度なファンはもとより、「綺麗ね～」と溜め息をついて心から楽しむ一般のバレエファン層に大きく広がってきたと思う。こうした広がりは、本当に大切なことで嬉しいことだ。が、半面、もっとも敏感な観客層でもある。おもしろくなければ、来なくなるからだ。レストランの味が落ちると客足が遠のくのと同じだ。新国のコンテンポラリーダンスも、今後、どういう方向に進んで行くのか、大切な時期に来ているようにも感じる。より個性化し先鋭化するのも1つの選択肢だ。エンターテインメント性を高めるのもひとつの選択肢かもしれないが、その線引きは難しいところだ。いずれにせよ、日本を代表する国立バレエ団として、国際的に通用する確固たる演目がなければならない。古典バレエと、新作を含む現代バレエの両立も、すこし目鼻が付いてきたのだろうか。ビントレー監督は「現代バレエにも力を注ぎたい」と、かつておっしゃっていた。その成果が、現れてきているように感じる。振り付けはもとより、音楽、舞台美術、照明、衣装など、ビントレー監督にインスパイアされて、新国立バレエが学び手にしてきたものは、限りなく豊かで大きいと思う。（後期について）新国立バレ	
--	--	--

エが、振り付けや出演者として参加した「DANCE PLATFORM 2012ユニット・キミホ」と「First Steps」は大変興味深く拝見した。クラシックバレエとは違う『リアリティ』を求められるダンスの世界で、ダンサーや振付家が、どこまで自分自身を裸にして表現できるのか、様式にとられない世界でどのような自己表現が叶うのか。コンテンポラリーなものでありながらも、表現の『放出』だけでなく、観客との『融和』も想像されて、日本人の優しさを感じる創作になっていた。森山開次氏の作品もエネルギーで美しかったし、高谷史郎氏の「明るい部屋」も空間の使い方がユニークであったが、私は、まだ未熟で不定形ながら、品格と爆発力を持った、新国立バレエのオリジナル作品により強い期待感を感じた。

(3)営業、広報面について

- ・ ホームページが大変充実しており、公演前、公演後と、長い期間、多角的に演目について知識を深めることができるコンテンツに感嘆している。バレエ団ブログのような、親しみやすい公演の裏側（お稽古の様子、団員の皆様の日常など）から、演目についてより深く、幅広く理解できる、知的なコラムまで、様々な観客の興味に応える幅広い内容が魅力的である。「永遠のファム・ファタル」と題して、バレエの「マノン」と、同時期に上演している、演劇部門の「サロメ」を取り上げたコラムなど、他部門の演目ともリンクさせたこのような取組は（少し前にはオペラ部門との「こうもり」の「競演」もあった）、観客にいろいろな事象のつながりを示唆し、新たな興味を喚起させるという点で、非常に有意義だと思う。内容が会場で販売されているプログラムとかぶっていないのもエライ！（かぶっていたらプログラムを購入する必要、なくなる）。こうした形で、時代や文化を幅広くとらえて演目を紹介する試み、ぜひ今後も続けていただきたい。なじみの少ない現代作品や振付家についての記事やビデオをフォワイエで紹介しているのは、好奇心もそそるし、長い休憩時間のヒマつぶしにもなり、よいアイディアだと思う。大雪の折、開演を10分遅らせたり、終演後に、全ての交通機関の運行状況を貼り出したりしてくれた劇場の方々の御配慮は迅速で、状況の分からない公演後のお客様に安心感を与えるものでもあり、日本らしい細やかなサービスだと思った。

- ・ 各演目についての情報は、ホームページやジ・アトレ等においてきめ細かく提供されていると感じる。とくに動画などを多用したプロモーションは充実度を増している。一方で、関心を持って情報にアプローチしてくる人たち以外の、潜在的な顧客に対する仕掛けはまだ工夫の余地を残しているように思う。バレエ／ダンスへの関心を一般の人々に広げていくためのアイデアが望まれる。また、劇場の運営や財務的な部分についての広報が、公益財団としての義務的な開示レベルに依然としてとどまっているのも残念だ。関心を持ってチェックする人は多くないかもしれないが、今後、民間資金の比率を上げていくべきことを考えると、そういう部分も分かりやすく説明していく努力が必要だろう。

- ・ 定番の古典バレエとは異なり、コンテンポラリーダンス、コンテンポラリーバレエ、地域招聘公演は集客が難しいと思われるが、善戦していた。長期的に見れば、これらの作品を理解できる観客を育てることが、観客全体のレベルアップにつながり、さらに観客から見られるバレエ団をレベルアップさせることになる。コンテンポラリーダンスでも比較的集客しやすい人気作家やダンサーをバランスよく使いながら、試みを継続してほしい。ネットを使った公演前からの具体的な情報発信（インタビュー、リハーサル風景など）が評価できる。

4. アンケート調査

4公演で4回実施した。
 有効回答数403 人（配布数2,714人、回収率14.8%）。回答者の87.8%が概ね満足と答えた（354人）。
【特記事項】
 ・ 平成24年9月、2014/2015シーズンからの舞踊部門の次期芸術監督予定者として、大原永子氏が芸術参与に就任した。
 ・ 「曼荼羅の宇宙」は、チケット発売前から好評を得て、追加公演を実施した。
 ・ 森山開次が平成24年度（第63回）芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞した（「曼荼羅の宇宙」の成果に対して）。
 《数値目標の達成状況》
【目標入場者数の達成状況】
 実績6,024人／目標5,310人（達成度113.4%）

2－(2)－④ 演劇

1. 公演実績

公演名	劇場	期間	区分	回数	日数	入場者数	入場率	総席数
「まほろば」	小劇場	4/2（月）～15（日）	実績	16 回	12 日	3,614 人	(69.3%)	5,216 人
			計画	16 回	12 日	3,800 人	(74.2%)	5,120 人
「負傷者 16 人 —SIXTEEN WOUNDED—」		4/23（月）～ 5/20（日）	実績	28 回	25 日	8,475 人	(87.8%)	9,654 人
			計画	28 回	25 日	7,000 人	(78.1%)	8,960 人
「サロメ」	中劇場	5/31（木）～ 6/17(日)	実績	18 回	16 日	13,135 人	(92.4%)	14,220 人
			計画	18 回	16 日	10,400 人	(73.3%)	14,184 人
「温室」	小劇場	6/26（火）～ 7/16（月・祝）	実績	20 回	19 日	6,059 人	(87.1%)	6,960 人
			計画	20 回	19 日	4,800 人	(75.0%)	6,400 人
「リチャード三世」	中劇場	10/3(水)～21(日)	実績	18 回	17 日	11,662 人	(82.2%)	14,184 人
			計画	18 回	17 日	10,400 人	(73.3%)	14,184 人
「るつぼ」	小劇場	10/29(月)～ 11/18(日)	実績	20 回	19 日	6,106 人	(82.6%)	7,396 人
			計画	20 回	19 日	4,800 人	(75.0%)	6,400 人
「音のいない世界で」		12/23（日・祝）～ 1/20（日）	実績	28 回	21 日	8,715 人	(94.0%)	9,272 人
			計画	28 回	21 日	6,400 人	(71.4%)	8,960 人
「長い墓標の列」		3/7(木)～24(日)	実績	16 回	16 日	3,559 人	(68.2%)	5,216 人
			計画	16 回	16 日	3,800 人	(74.2%)	5,120 人
【演劇 合 計】 8 公演（計画：8 公演）			実績	164 回	145 日	61,325 人	(85.0%)	72,118 人
			計画	164 回	145 日	51,400 人	(74.1%)	69,328 人

	2. 営業・広報 ・「海外戯曲 春から夏へ」「負傷者 16 人」、「サロメ」、「温室」の 3 公演)、「それぞれの魅力—秋から冬へ—」(「リチャード三世」、「るつぽ」、「音のいない世界で」3 公演)と題して、特別割引通し券を発売した。 ・空席のある場合に限り事前に半額で予約できる 25 歳以下の若年層を対象とした「アカデミック・プラン」を実施するとともに、26 歳以上 39 歳以下の年齢層を対象に、「アカデミック・プラン」同等のサービスを提供する「アカデミック 39」を新たに立ち上げた。アカデミック・プランの発動に際し、演劇俳優養成所に所属する 25 歳以下の方を対象に団体として取りまとめて受け付けるなどの施策を行った。 ・演劇鑑賞団体やカード会社、生活協同組合など再販組織に対しての団体販売を行うとともに、出演者・作家・演出家のファンクラブや関連分野の大学教員、常連客等に対しても積極的に営業活動を行った。 ・内容に関連のある新国立劇場の他ジャンル主催公演と連携し、当該公演のチケット購入者に指定の演劇主催公演のプログラム引換券を進呈するキャンペーンを実施した。 ・「国立劇場・新国立劇場ダブル観劇キャンペーン」として、該当する国立劇場歌舞伎・文楽公演チケットの提示により、指定の新国立劇場主催公演チケットを割引価格で購入できるキャンペーンを実施したほか、国立劇場の協力を得て、各公演会場にキャンペーン告知ポスター及びチラシを設置した。 ・マスコミ各社への取材依頼、ポスター、チラシ、インターネット、ジ・アトレ会報等により、公演の周知を図り、集客に努めた。 ・開場 15 周年に当たる平成 24 年度、2012/2013 シーズンの開幕公演として、オペラ「ピーター・グライムズ」、バレエ「シルヴィア」、演劇「リチャード三世」と、3 部門とも英国ゆかりの作品を上演。このことから、ブリティッシュ・カウンシルとの共催により、英国をテーマに舞台芸術の普及を図る企画「新国立劇場・英国舞台芸術フェスティバル 2012」を劇場挙げて開催した。期間中は特設サイトを開設して随時情報を発信、同フェスティバルの関連企画として、英国大使館で記者発表を行うとともに、その模様を動画中継システム(USTREAM)により配信したほか、各演目や英国の文化芸術に関連する各種の講座、トークセッション、展示、上映会、装飾等を実施し、関心を刺激するとともに活気に満ちた空間で来場者を迎えた。 ・演目別の広報については、様々な角度からアピールする方法を検討し、きめ細かいマスコミ対応による記事掲載の促進や、特設サイトにおける動画の活用をはじめとしたコンテンツの充実、他劇場での告知活動、e メールクラブ会員に対して公演関連情報や芸術監督のメッセージの送信などを行ったほか、演目ごとにブログを開設し、チケット情報、稽古の様子、公演準備の様子、公演の背景に関する解説や考察などの充実したコンテンツを掲載。観客向けのより詳細な情報を随時発信することで、多くの人々の期待感を醸成し、鑑賞へと結び付けた。 ・24 年度に新しく、新国立劇場演劇ツイッターアカウントを開設。チケット情報などを迅速かつ継続的に発信し、公演へのより一層の関心を喚起するとともにファン作りに努め、既存の観客にも好評を博するとともに、新規観客の開拓においても効果を期待されている。 ・舞台稽古の制作発表(フォトコール)を実施し、マスコミへのアピールを行った。また、テレビ局との共催により、コマーシャル映像及び音声を作成し、テレビ・ラジオ・インターネットで放送するなど、大規模かつ広範なプロモーションを展開した。 ・インターネットを活用した特設サイトの開設や動画掲載、他劇場での告知活動などを通じて、公演に	
--	--	--

対する注目度を向上させるとともに、期待感を高めるよう努めた。出演者へのインタビューや舞台稽古の様子を動画として収録、インターネット上で公開するとともに、演劇主催公演の会場にモニターを設置して放映するなどした。

- ・ また、プレイガイドの「ぴあ」や演劇専門ウェブサイトの協力を得て稽古場取材記事のサイト掲載や、それと連動したメルマガ会員へのチケット割引販売を実施したほか、「イープラス」、「ローソンチケット」など他のプレイガイドとも連携し、当該プレイガイドホームページへのキャスト及びスタッフによるメッセージ動画の掲載や、同ホームページから新国立劇場ホームページ動画欄へのリンク設定などを行った。
- ・ インターネットで関連キーワードを入力すると新国立劇場の広告が自動的に表示される「検索キーワード連動型広告」というアプローチを行い、精密な営業活動を行った。
- ・ 新国立劇場愛好者に対し e メールにて各種情報を提供、必要な情報を的確に周知し、顧客の利便性の向上に資した(e メールクラブ)。DM メンバーの入会促進(無料)を図り、これら DM メンバーや e メールクラブメンバーに対し、積極的に毎公演、先行発売やイベント情報の配信、販促活動を行い、効果を上げた。また、開幕後に寄せられたアンケートの声をまとめ、配信した。
- ・ 演劇主催公演や他劇場の各種公演会場において継続的にチラシの折込・配布を行った。
- ・ 初演時の観客の声などをまとめた紙媒体のプリントを作成し、配布した。
- ・ 公演内容に関連のある施設や団体から各種参考資料を借り受け、公演の PR において活用したことに加え、団体でのチケット購入やチラシ配布の協力を得た。
- ・ 戯曲の出版に合わせ、帯広告に公演の紹介を掲載したほか、チケットキャンペーンを行った。また、書店でのチラシ設置の協力を得た。
- ・ 公演会場にて公演関連書籍・物品・飲食物等の販売や、公演関連情報の掲示を行い、会場のにぎわいを演出するとともに公演に対する理解を深め、顧客満足度の向上を図った。

3. 外部専門家等の意見

(1)公演全体について

- ・ 宮田芸術監督の任期二年目の前期は、一年目にまして芸術監督の方針が明確に伝わってきたレパートリーの並びだった。『まほろば』は再演。それも新国立劇場が生み出した作品で、レパートリーシステムではない劇場で、こういう作品ならレパートリー同様に扱ってもいいのではないかという提案のように思える再演である。そういう言い方ができるなら、前年に上演された『焼肉ドラゴン』等もその一つと言っていいだろう。新作が消耗されていくだけのことが多い日本で、これは貴重な試みであり、それに応える内容のある上演だった。もう一つは、海外の新しい紹介すべき作品を紹介する路線で、この路線では、『負傷者 16 人』が意義深い成果を挙げた。それと、忘れてはならない海外戯曲として上演された『温室』も含めて、日本の観客にとっては身近ならざるパレスチナ問題、ユダヤ問題といったテーマを並べたことを評価したい。ともすると避けて通りがちなこのようなテーマに挑戦できたのは、国立劇場なればこそその成果と思いたい。海外戯曲の紹介を通じて新劇のイメージを形成してきた作品の再評価として上演された『サロメ』は、従来の先入観を払拭する試みとして、意義深いものがあった。このような試みも、新国立劇場の役割に違いない。以上 4 作品、芸術監督が、これこそ国立劇場の任務だと考えての方向として、納得できるものがあった。惜しむらくは新作がないことだが——直前に『パーマ屋スミレ』もあったことだし、後期にも予定されていることなので、それについては年間を通じて評価ということにしたい。(後期は)長時間記録を競う作品が並んだシーズンだった。『リチャード三世』が 3 時間 40 分、『るつぽ』

が3時間40分、『長い墓標の列』が3時間半と、いずれも3時間を超える。シェイクスピアは別格としても、あとの二本は新劇の上演が3時間を超え、時に4時間を超えるものがあったとしても当然とされた時代の産物である。現今の劇場事情からすれば非常識としか言いようのないこの長さに挑戦させたのは、長くともそれが障害にならないほど緊張感に富んだ舞台になるという、企画者・演出者の自信だろう。三本とも、それを裏付ける出来だった。主に公立の会館の閉館時間の制約と、地方・郊外のバスの最終時間の制約から、2時間が標準になってしまった現在では、考えられないような大胆な企画を実現したのは、新国立劇場ならではのあり、称賛を送りたい。また『るつぽ』も『長い墓標の列』も見せ方にこだわるのではなく本質的なドラマを追求する演出、演技であったことも、成功の一因であった。

- ・24年度前期は全体的に内容においては見るべきものはあったが、ダイナミックな作品群とはならなかった(サロメなど大掛かりなものはあったが)。前年度もそうだが、後期に魅力的なものが並んだ。今、後期も同じ傾向が感じられる。「リチャード三世」から「長い墓標の列」迄、観賞欲をそそられるラインナップである。年間を通してバランスが取れた企画を打ち出した方が良いと思うが。(後期について)定着した年度シリーズが効果的に作用し、バランスの良い企画として受け入れられてきている。重厚な戯曲、話題性も視野に入れた企画(キャスティングも含めて)が提供されており良い。その中でも、どうしても繰り返し上演され続けてきた翻訳劇の確かさと、新作創作劇の完成度の違いが明確に出た感がある。ときどき本公演に組み込まれた研修所出身キャストの演技力も、遜色ない技量が見受けられ、違和感がなくなっている。

- ・今期(前期)は、「負傷者16人」という新しいヒットがあった。読売演劇大賞の中間選考委員会において上半期ベスト5として、作品賞にノミネートされ、主演の井上芳雄は優秀男優賞、あめくみこは優秀女優賞候補とされた(7月30日発表)。これは日本の劇壇をリードすべき新国立劇場として誇るべき成績である。「サロメ」「温室」の失敗はあった、大きなヒットが出せていれば吉とすべきであろう。「サロメ」も「温室」も舞台美術に工夫があって斬新だっただけに残念であった。しかし、「まほろば」の再演もよいものであり、全体としてはよい成績を残したと言うべきであろう。(後期について)「リチャード三世」は興行的に成功し、「るつぽ」は芸術的完成度の高い作品となった。3月の「長い墓標の列」は新国立劇場演劇研修所の成果をとりこむ有意義な公演であった。総じて日本の演劇界をリードする新国立劇場の役割を十分に果たす結果となった。ただし、難しい作品が多かったのも、もう少し喜劇的作品がラインナップに入っていた方が、親しみやすかったかもしれない。いずれもレベルの高い公演を行っている。

- ・(前期について)(海外)新作・旧作上演レパートリーのバランスを理解する「負傷者16人」が出色。「サロメ」「温室」には、多くの観客に過度の期待があったと思われる。その分、割を食ったはず。合格をつけられる舞台だったのだが。(後期について)「長い墓標の列」の新国立上演は画期、だったと思う。60年代における小劇場以前(前夜)の、いわゆる「新劇」(現代演劇)リアリズムを汲みなおすという意味においてもこういう企画は大事にしたい。「悲劇喜劇」の新国立劇場15周年の特集の栗山・鶴山・宮田の鼎談には、これからの新国をめぐるヒントがいくつもあるはずだ。

(2)創作面について

- ・企画として取り上げられた作品の成果が二つに分かれたと思う。シリーズとして、シーズンを通してのサブタイトル《JAPANMEETS》として取り上げられた「サロメ」と「温室」の翻訳劇2本は、企画としてはおもしろいが、やや観客の視点に立って見ると、演劇的魅力を提案する方法としては不満を感じた。一方で、再演する価値を持った作品をさらに磨いたもの、現世界の実情を描く強さから、「まほろば」と「負傷者16人」は見応えある作品に仕上がっていた。企画の段階でこの差を読み切るのは難しい。何時も悩ましい事ではある。「マンスリープロジェクト」は充実しているのではないか(一度しか参加してい

なくて、後は告知の案内文からの推測だが)。芝居を観る前に、後で、そして今後の為のちょっとした実験等、観客との大きな接点になる。(後期について)創作劇については、「戯曲完成、即本公演」が日本の現状ではあるが、完成度の高い戯曲を次世代に残すためにも、新国立ならではの公演形態を取り入れる余地はないのか、検討されたいと思う。広い稽古場もあり、実験劇場としての小劇場もそういった使用(創作劇の実験的上演)に利用できれば効果が出る。単体経営が志向されている現状では難しいことではあるが、新作上演においては、その過程を経て完成度の高い本公演へと持ち込む方がなお良い。

- ・ 2011/2012(24 年度前期)は、「負傷者 16 人」につける。「まほろば」の上演も成功。機会があればこれからも新国から地方公演へと拡大させていければと思う(例、シベールアリーナ)。(後期について)新作は「音のいない世界で」.<こどもからおとなまで>.<こども>の方が<おとな>より、はるかに深く劇世界をつかんでいたかもしれない。新国の劇は、窓を広く社会に開いた劇をつくる使命をもつ、と思う。そして可能性の劇を探究することも新国の使命。対極に「リチャード三世」のようなスペクタクルを据えるレパートリーの妙を大切にしたい。

- ・ (前期は)新作はなかったので、アフタートークの在り方について、ここで述べておきたい。「サロメ」と「温室」において 1 時間に及ぶアフタートークを行ったが、1 時間に及ぶのは非常識であり、15 分から長くても 30 分で要点をまとめたトークにすべきであろう。観客に対するサービスの姿勢を再検討していただきたい。それはプログラムにおいて、作品解説がきちんとなされていないことにも通じる。新作であるならば作品解説がなくても仕方がないが、ある程度、研究の対象となる作品であるならば、しっかりとした解説を行ってほしい。新国立劇場は国民に対して演劇という教養を供給するという誇りと矜持を持って、サービスや作品解説の必要性をしっかりと認識してほしい。(後期について)新作の「音のいない世界で」は、企画自体はよかったのだが、結果としてあまりふるわなかった。新作は常に冒険性があるべきなので、そのこと自体は問題とすべきではない。ただ、小劇場の機能をさらに活かすために、もっと創作面に力を入れてもよい。具体的には新作の数を増やすことは考えられないか。イギリスのナショナル・シアターでは最も小さな劇場コテスローにて多くの新作が生まれており、ハイ・レベルの公演を続けると同時に、イギリス演劇の新たな世代を自ら育成している。新国立劇場は小劇場をできるだけ貸小屋にせず、積極的な運営を考えてほしい。

- ・ (後期について)子供観客をイメージした『音のいない世界で』には、期待があった。身体的表現には定評のある演技者を二人もそろえて、松たか子とどういう組み合わせを実現するのか。この作家は子供をどうとらえるのか、期待をそそられたが、その期待は裏切られた。俳優の特質は生かされず、作家・演出家には、明確な子供像がなかった。あるべき形が見えないための迷いがあったのだろうが、表現のあちこちにつめの甘いところがあって、大人だけがおもしろがる趣味のレベルでまとまっている。先進国のどこにもある国立・公立の児童劇場が、日本には皆無だという恥ずべき状況を、克服する好機だったが、残念である。児童青少年演劇への真摯な取組を期待したい。

(3)営業、広報面について

- ・ (前期について)私が劇場を訪れた回は常に観客席が埋まっている印象があり、営業はとてもよくがんばっているのではないかと感じる。リーディング等の様々な企画によって観客を集めることも活発であるようで、こうしたことはそのまま続けていけばいい。あとは、当日の残席を学生等に売るやり方をもう少し工夫するなどして、若者がもっと新国立劇場に足しげく通うようにしてほしい。(後期について)宣伝・集客にさらなる効果が望まれる。キャンペーン等を行い、特に学校などに働きかけて若い観客をとりこむことはできないだろうか。貸小屋にするのではなく、優秀な若い人材を育てるような企画を立ててほしい。

	い。 ・（前期について）演劇書（上演台本など）の販売コーナーは大切だと思う。こういう機会をとらえて、上演台本などを知ってもらいたい。いまのフツウの学生（若者）は戯曲という表現形式を知らないのです。（後期について）未来の観客（高校生・大学生は現在の観客であると同時に未来の観客）のための広報活動を拡大したい。観劇体験を持つ（本を読む）大学生は絶対少数。やはり彼らを将来の新国観客にするための方法を考えていきたい。教室（やまた、教室外）でもせいぜい私は初台新国のことを話しているのだが、マンスリー・プロジェクトのさらなる継続を。 ・（後期について）『長い墓標の列』は作者と同時代の観客が目立った。彼らが来やすい時間での上演がどれほどあったか、いささか心配になった。『音のいない世界で』を子供観客に積極的に見せる意図がどれほどあったのか。私の見た回は圧倒的に大人観客ばかりだった。つまらなければ大人しくはしていない子供観客の目にさらされることが、この種の企画を成功に導く鍵なのである。 ・（後期について）近年、通し券の販売が成果として挙げているようで、新国立の公演全体を一貫して観てもらうのは、新国立劇場の上演姿勢を見せる上でも有効だと思う。 4. アンケート調査 8 公演で 8 回実施した。 有効回答数 704 人（配布数 3,333 人、回収率 21.1%）。回答者の 91.9%が概ね満足と答えた（647 人）。 【特記事項】 「負傷者 16 人-SIXTEEN WOUNDED-」において以下の賞を受賞した。 ・ 第 20 回読売演劇大賞優秀作品賞 ・ 出演者の井上芳雄が平成 24 年度（第 63 回）芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞した（本作、「組曲虐殺」、「ダディ・ロング・レッグズ」及び「ルドルフ ザ・ラスト・キス」の演技に対して）。 ・ 出演者のあめくみちこが第 20 回読売演劇大賞優秀女優賞を受賞した（本作及び「竜馬の妻とその夫と愛人」の演技に対して）。 ・ 美術の土岐研一が第 40 回伊藤雄之助賞新人賞を受賞した（本作の美術に対して）。 「リチャード三世」において以下の賞を受賞した。 ・ 美術の島次郎が第 20 回読売演劇大賞最優秀スタッフ賞を受賞した（本作及び「NASZA KLASA」の美術に対して）。 ・ 出演者の那須佐代子が第 47 回紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞した（本作及び「THAT FACE その顔」の演技に対して）。 「パーマ屋スミレ」（平成 23 年度公演）において以下の賞を受賞した。 ・ 出演者の根岸季衣が第 20 回読売演劇大賞最優秀スタッフ賞を受賞した（本作及び「しみじみ日本・乃木大将」の演技に対して）。 《数値目標の達成状況》 【目標入場者数の達成状況】 実績 61,325 人／目標 51,400 人（達成度 119.3%）	
--	---	--